

# 大坪遺跡・大坪南遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第619集

縄文時代と奈良時代の遺物包含層の調査

1999

福岡市教育委員会

# 大坪遺跡・大坪南遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第619集

縄文時代と奈良時代の遺物包含層の調査



1999

福岡市教育委員会

## 序

福岡市では、老朽化した市営住宅の建て替えを進めていますが、今回報告する大坪遺跡・大坪南遺跡の調査も福岡市営第一旭ヶ丘・第二旭ヶ丘団地の建て替えに伴って行った調査です。両遺跡は早良平野の最奥部の内野地区の住宅街にあり、周辺での調査例はほとんどなく、内野地区住宅街での最初の調査例となります。従って発掘調査自体の成果とともに、周辺市民への周知化という面でも有意義な調査でした。

遺跡の内容は、大坪遺跡は縄文時代の遺物包含層、大坪南遺跡は奈良時代の遺物包含層と製鉄関連の遺構で、ともに良好な遺物群が出土し、今後の周辺地域の調査に指針を与えました。

今回の調査でご理解・ご協力をいただいた地元の皆様、福岡市建築局に感謝いたしますとともに、本書が市民の埋蔵文化財への理解と認識を深め、また研究資料としてご活用いただけましたら幸いです。

平成11年3月31日

福岡市教育委員会

教育長 町田 英俊

## 例　　言

- 1 本書は早良区内野地区における市営第一旭ヶ丘・第二旭ヶ丘団地の建替工事に伴い、福岡市教育委員会が平成8・9年度中に行った埋蔵文化財の事前調査の報告である。
- 2 本書に掲載した写真の撮影は米倉秀紀が行った。
- 3 本書に掲載した遺構の実測は米倉・宮原邦江が行った。
- 4 本書に掲載した遺物の実測は米倉・平川啓介・名取さつき・大塚拓史が行った。
- 5 本書に掲載した製図は米倉が行った。
- 6 本書の遺物番号は遺跡ごとに通し番号で示し、図と図版の番号を一致させた。
- 7 本書の編集・執筆は米倉が行った。
- 8 付編に大澤正巳氏の玉稿を賜った。
- 9 本書に関わる図面・写真・遺物などの一切の資料は、福岡市埋蔵文化財センターに収蔵・保管される予定である。

### 大坪遺跡第1次調査

遺跡調査番号	9665	遺跡略号	O U T - 1	分布地図番号	早良 16
調査地地番	福岡市早良区内野1丁目387-2				
開発面積	3,470 m <sup>2</sup>	調査面積	347 m <sup>2</sup>	調査原因	公営住宅建替え
調査期間	1997年1月13日～2月1日			担当者	米倉 秀紀

### 大坪南遺跡第1次調査

遺跡調査番号	9705	遺跡略号	O T M - 1	分布地図番号	早良 17
調査地地番	福岡市早良区内野3丁目316-6				
開発面積	11,652 m <sup>2</sup>	調査面積	601 m <sup>2</sup>	調査原因	公営住宅建替え
調査期間	1997年4月7日～6月7日			担当者	米倉 秀紀

## 目 次

### 序・例言

### 本文目次

1 調査に至る経緯と調査組織	1	
2 遺跡の立地と環境	1	
3 大坪遺跡第1次調査	4	
(1) 調査の経過と調査概要	4	
(2) 層序	4	
(3) 遺構と遺物	8	
① 遺物の出土状況	8	
② 遺物包含層出土遺物	8	
③ ピット及び同出土遺物	11	
(4) まとめ	11	
4 大坪南遺跡第1次調査	12	
(1) 調査の経過と調査概要	12	
(2) 層序	13	
(3) 遺構と遺物	14	
① 土坑	14	
② 土器セット遺構	23	
③ ピット出土遺物	24	
④ 遺物包含層出土遺物	24	
(4) まとめ	33	
付編 大坪南遺跡出土培塿（取鍋状）付着溶融物の金属学的調査	大澤正己	34

### 挿図目次

図1 大坪遺跡・大坪南遺跡の位置と早良平野の主要遺跡位置図	2
図2 大坪遺跡・大坪南遺跡調査地点位置図	3
図3 大坪遺跡・大坪南遺跡の位置（明治年間）	3
図4 大坪遺跡J-5区北壁土層断面図	4
図5 大坪遺跡D-4区～J-4区西壁土層断面図	5
図6 大坪遺跡地山面全体図	6
図7 大坪遺跡遺物出土位置図	7
図8 大坪遺跡出土縄文時代遺物	9
図9 大坪遺跡ピット及び同出土遺物	10
図10 大坪南遺跡全体図	12
図11 大坪南遺跡土層断面図	13
図12 大坪南遺跡SK001～SK007	15
図13 大坪南遺跡SK001～SK011出土遺物	16

図14 大坪南遺跡SK008～SK012	18
図15 大坪南遺跡SK012出土遺物	19
図16 大坪南遺跡SK013～SK021	21
図17 大坪南遺跡土器セット遺構及び同出土遺物	22
図18 大坪南遺跡ピット出土遺物	23
図19 大坪南遺跡出土縄文時代遺物	25
図20 大坪南遺跡下部包含層出土遺物	26
図21 大坪南遺跡上部包含層出土遺物Ⅰ	27
図22 大坪南遺跡上部包含層出土遺物Ⅱ	29
図23 大坪南遺跡上部包含層出土遺物Ⅲ	31
図24 大坪南遺跡上部包含層出土遺物Ⅳ・搅乱出土遺物	32

#### 図版目次

- 図版1 (1) 大坪遺跡調査区全景 (2) 同J-3区土層断面 (3) 同C-8区全景  
 図版2 (1) 大坪遺跡B-10区全景 (2) 同ピット遺物出土状況 (3)・(4) 同包含層遺物出土状況  
 図版3 (1) 大坪南遺跡から見た大坪遺跡 (2) 大坪南遺跡出土遺物Ⅰ  
 図版4 大坪遺跡出土遺物Ⅱ  
 図版5 (1) 大坪南遺跡近景 (2) 同全景  
 図版6 (1) 大坪南遺跡土層断面 (2) 同調査区最東端土層断面  
     (3) 同E-1区東壁土層断面(縄文層) (4) 同縄文層遺物出土状況  
 図版7 大坪南遺跡の土坑Ⅰ(SK002～SK008)  
 図版8 大坪南遺跡の土坑Ⅱ(SK010～SK014)  
 図版9 大坪南遺跡の土坑Ⅲ(SK015～SK019)・同SK012遺物出土状況  
 図版10 大坪南遺跡の土坑Ⅳ(SK020～SK022)・同土器セット遺構  
 図版11 大坪南遺跡出土遺物Ⅰ  
 図版12 大坪南遺跡出土遺物Ⅱ  
 図版13 大坪南遺跡出土遺物Ⅲ  
 図版14 大坪南遺跡出土遺物Ⅳ  
 図版15 大坪南遺跡出土遺物Ⅴ

## 1 調査に至る経緯と調査組織

福岡市建築局は老朽化した市営住宅の建替えを、順次行なっている。平成8年度に第1旭ヶ丘団地、平成9年度中に第2旭ヶ丘団地の建替えを行うため、教育委員会埋蔵文化財課ではそれぞれに試掘調査を行った結果、ともに遺跡の存在が明らかになり、各年度に発掘調査を実施した。なお、両地点とも周知の埋蔵文化財附蔵地ではなかったため、8年度に調査を行った地点を字名をとって大坪遺跡、9年度に行った地点を大坪南遺跡と命名した。

### 調査組織

調査委託 福岡市建築局

調査主体 福岡市教育委員会文化財部埋蔵文化財課

平成8年度（大坪遺跡第1次調査）

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

第1係長 横山邦繼

調査担当 米倉秀紀 庶務担当 内野保基

平成9年度（大坪南遺跡第1次調査）

埋蔵文化財課長 荒巻輝勝

第1係長 二宮忠司

調査担当 米倉秀紀 庶務担当 内野保基

平成10年度（整理・報告）

埋蔵文化財課長 柳田純孝

第1係長 二宮忠司

調査担当 米倉秀紀 庶務担当 木原淳二

協力者 衛藤琴美・柴田加津子・竹田弘子・萩本恵子・蜂須賀博子

日名子節子・首藤洋・安野千裕

## 2 遺跡の立地と環境

大坪遺跡・大坪南遺跡は福岡市早良区内野に位置する。内野地区は福岡市西部に広がる、南北に伸びる早良平野の奥部に位置している。早良平野は二級河川室見川に解析されてきた扇状地を主体とする平野で、内野地区は室見川とその支流で内野地区的東側を流れる小笠木川に挟まれた地点にある。両遺跡はその両河川の合流点を南に約300m行った小笠木川沿いに位置する、隣接する遺跡である。大坪遺跡は大坪南遺跡の北西側約300mに位置し、標高約54mを測る。大坪南遺跡はそれより一段低く、標高約53mを測る。

両調査地点は、福岡市土地分類（細部）調査図面集では、沖積扇状平野に分類されている。大坪・大坪南両遺跡とも地山は幾層にも及ぶ砂であり、両河川の堆積物によって作られた土地であると言える。大坪遺跡の方は、南側を除いて一段高くなっており、微高地の先端部という立地である。大坪南遺跡は北東に向かって傾斜する斜面上に立地し、調査地内の遺物包含層もその傾斜に沿って形成されている。大坪遺跡では、南側から堆積した砂の中に縄文時代の遺物が含まれており、奈良時代にはその上からピットが掘り込まれていることから、この間にも堆積作用が続いていることがわかる。なお、両遺跡とも砂層の下部0.5~1m下で疊層を確認した。

内野の市街地地区での発掘調査は今回が初めてのため、周辺の考古学的状況はよくつかめていない。少し範囲を広げると、宝見川を挟んで北西側に松木田遺跡がある。同遺跡では上面より弥生時代から古墳時代の集落が、下面から縄文時代早期初頭の遺構群が発見されている。さらに西側の丘陵地帯の先端部の長峰遺跡・黒塔遺跡などでは、弥生時代の甕棺墓群が発見されている。一方北側の東入部遺跡群では各時期の重要遺構が発見されているが、特に青銅器を副葬した墓地や古代の大型建物群や唐三彩などが目立った遺構・遺物である。またここでは奈良時代の鍛冶炉も多く発見されている。一方南側の丘陵部では、峯遺跡・駒山A遺跡などで、古代から中世にかけての小形の掘立柱建物群や製鉄関連の遺構などが検出されている。また点々と縄文時代早期・前期の遺物が丘陵上から発見されているが、遺構の検出例はない。

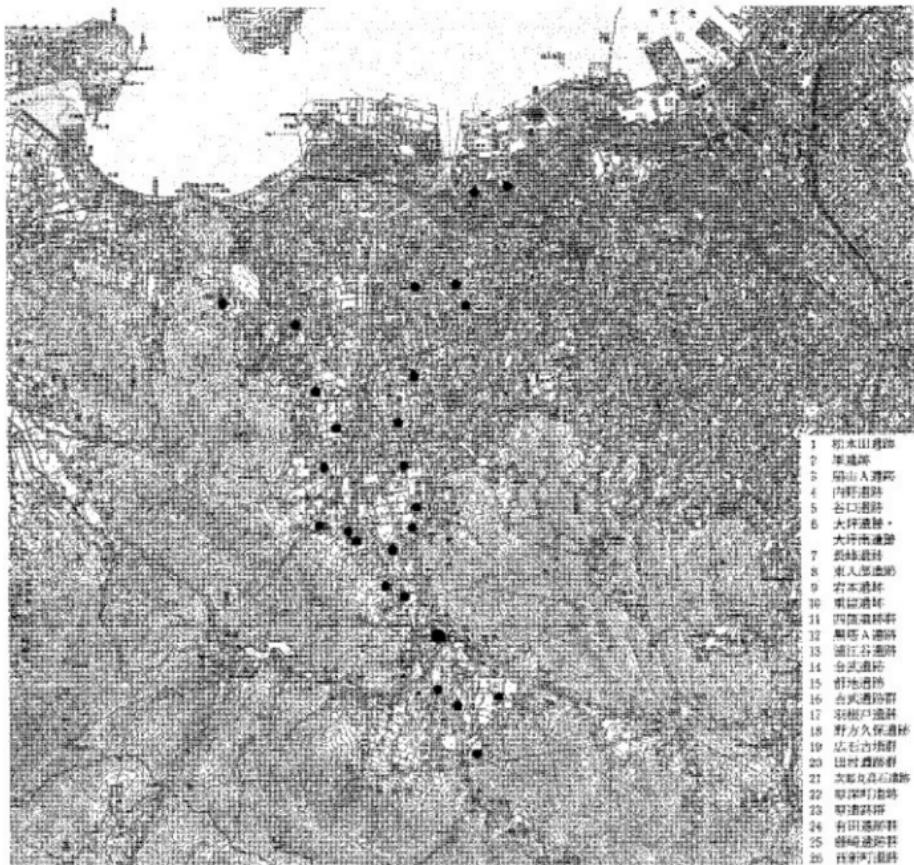


図1 大坪遺跡・大坪南遺跡の位置と早良平野の主要遺跡位置図

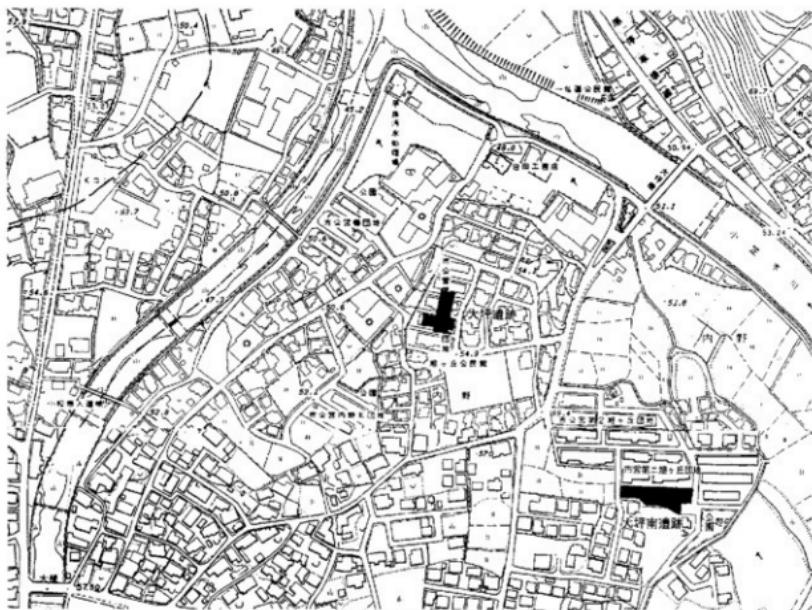


図2 大坪遺跡・大坪南遺跡調査地点位置図

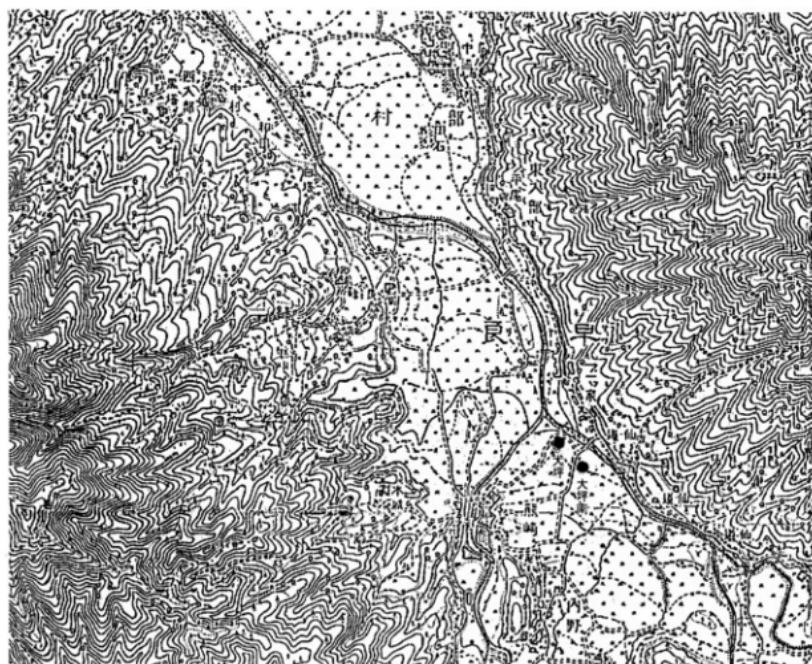


図3 大坪遺跡・大坪南遺跡の位置（明治年間）

### 3 大坪遺跡第1次調査

#### (1) 調査の経過と調査概要

発掘調査は平成9年1月13日に開始した。試掘では縄文時代の遺物包含層と、いわゆる風倒木状遺構が検出され、人為的な遺構の可能性は少なく、また遺物量も多くはないと考えられた。そのため、重機による表土剥ぎは、包含層が遺存していると考えられる部分を行い、その後 $2 \times 2$ mのグリッドを組み、任意に掘り下げを行った後、遺物の多かったグリッドの隣を掘り下げ、順次掘り下げグリッドを広げていくという方法をとった。

グリッドは南北方向が南からA・B・C···、東西方向が西から1・2・3···と名を付け、当初北はJまで、東は10まで設定した。調査区北側では、弥生土器と奈良時代の遺物を含む包含層が検出され、さらに北側に統一するため、調査グリッドをさらに北側へ延ばし、Nグリッド以北で包含層がないのを確認した。

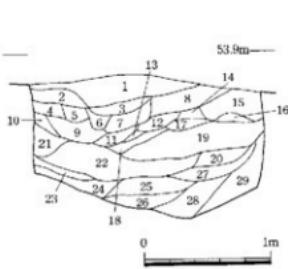
掘り下げにあたっては、包含層上面で遺構の有無を確認した後、出土遺物のドットを落としながら包含層が無くなるまで掘り下げた。調査グリッドの一部はさら下の層を確認するため、深く掘り下げた。その結果、明らかに人為的に掘り下げられた遺構は調査区北端で検出した奈良時代の土器が入ったピット1基のみで、他には自然に形成されたと思われる穴が多数発見された。それらの穴には縄文時代の遺物が入っているものもあるが、その多くが出土遺物はない。

出土した遺物は、縄文時代の遺物が最も多く、早期～晩期までの土器・石器を含んでいる。ただし細片が多い。ついで奈良時代の土器、他にはごく少量の弥生時代後期の土器が出土した。

調査は平成9年2月1日に終了した。

#### (2) 層序(図4・5)

層はほぼすべてが砂層である。一部北側の上層で、上を含んだ砂層がある。第3図に調査区の南北ペルト(D5区～J5区西壁)の土層断面図を掲げているが、これを見ると主として南側から堆積していく状況が分かる。これに合致するように縄文時代早期・前期の遺物は南側のD・E・Fグリッドあたりから多くが出土している。M・N区あたりでは前述の土含みの砂層があり、この層は端端な層で、自然層ではなく、人工的な整地層である可能性が高いと思われる。その層には主に奈良時代の遺物が含まれている。



- |                        |                           |
|------------------------|---------------------------|
| 1 明褐色砂まじり上             | 16 15より粘砂多い               |
| 2 黒褐色砂まじり土             | 17 淡黄色粘砂                  |
| 3 にじり褐色砂まじり上           | 18 17に少量の黒色を含む            |
| 4 2に淡黄色細砂少量含む          | 19 黄褐色シルトに少量の淡黄色細砂含む      |
| 5 4より砂多い               | 20 19に黒色土少量含む             |
| 6 3に淡黄色細砂含む            | 21 10より粘砂多い               |
| 7 淡黄色砂約3を少量含む          | 22 10と同じ                  |
| 8 1よりやや暗い              | 23 黄色土まじり粘砂に黒色土少量含む       |
| 9 4と5の中間               | 24 黄褐色まじり細砂               |
| 10 5に近い                | 25 黄褐色シルトに淡黄色細砂           |
| 11 黒色土に淡黄色細砂明褐色シルト少量含む | 26 25に黒色土少量含む             |
| 12 11より黑色土多い           | 27 25に黑色土を含む              |
| 13 11より淡黄色細砂多い         | 28 黒色土まじり砂に明褐色シルトと淡黄色細砂含む |
| 14 黑色土・淡黄色細砂           | 29 黑褐色土まじり砂               |
| 15 黒色土に少量の淡黄色細砂含む      |                           |

図4 大坪遺跡J-5区北壁上層断面図

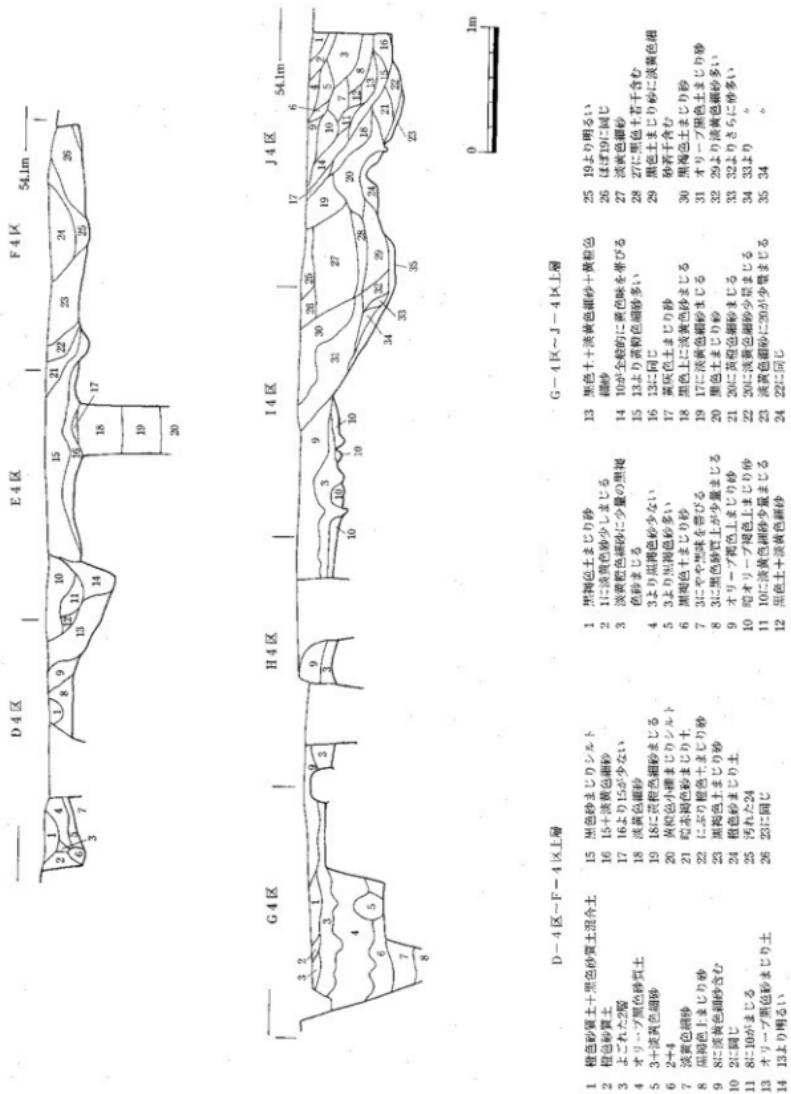


図5 大坪遺跡D-4区～J-4区西壁土層断面図

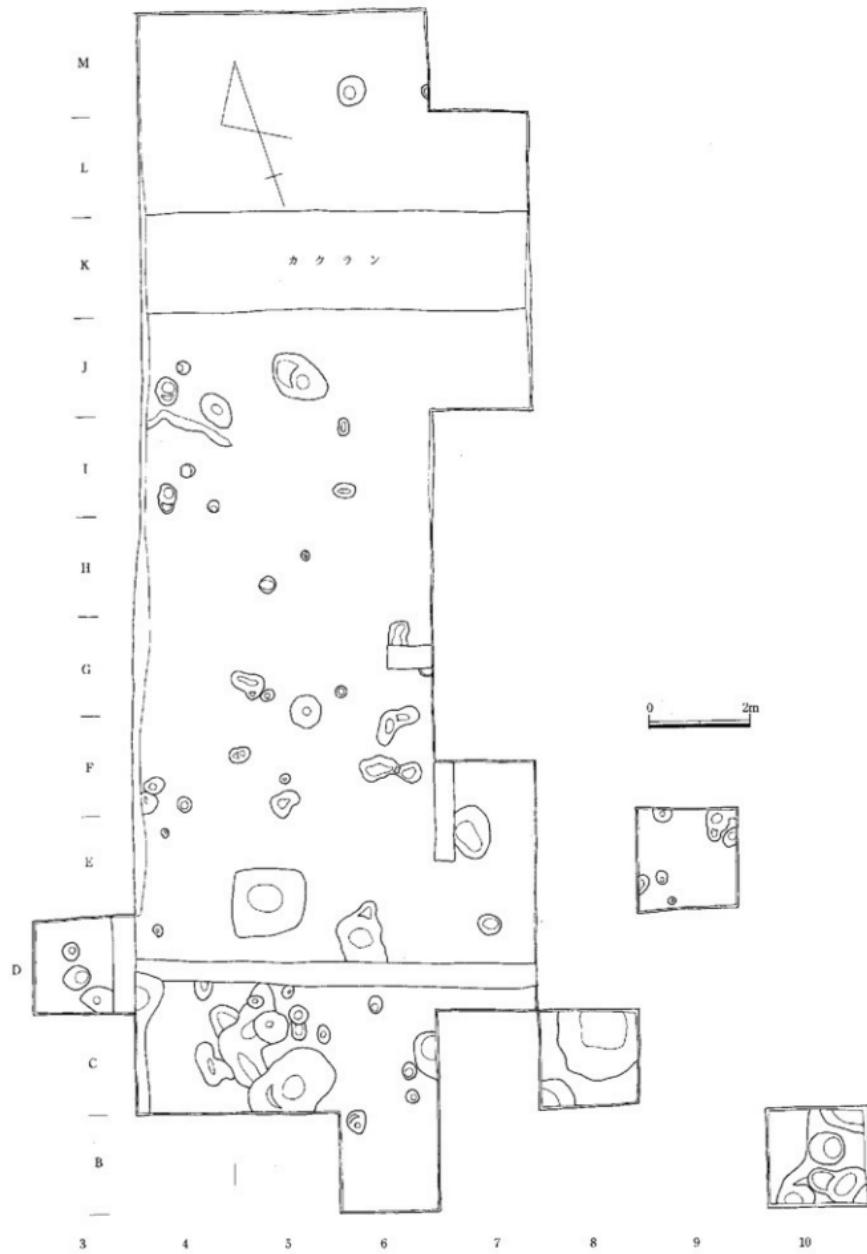


図6 大坪遺跡地山面全体図

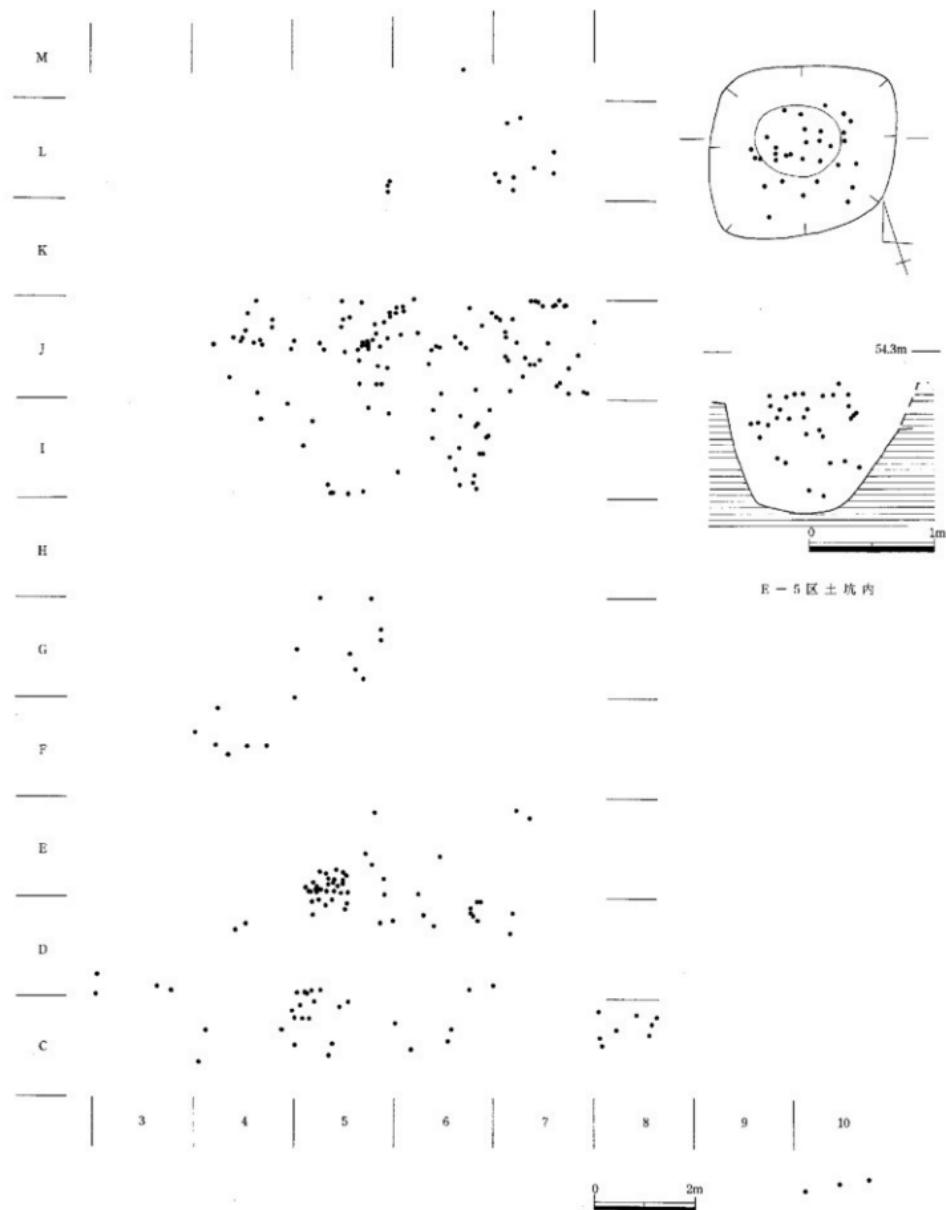


图7 大坪遗迹遗物出土位置图

### (3) 遺構と遺物

#### ① 遺物の出土状況 (図7)

検出した穴は土坑状のものやピット程度のものなどが多く見つかったが、それらは自然によって形成された凹凸やいわゆる風倒木状のものである。土坑状の穴からは遺物もほとんど出土しない。唯一E-5区で検出した十坑からは33点の土器片・石器片が土坑内から出土している。ただし、覆土は通常の堆積とは異なり、土坑以外の他の部分の堆積と同じく、南から順次堆積した一連の層の一部と考えられ、少なくとも埋まる過程においては他の層と同一の性格と考えられる。この穴から出土した遺物は黒曜石チップと縄文土器細片である。

遺物はC-Eの4~7区とI-Jの4~7区に出土集中区があるが、後者は弥生時代と奈良時代の土器片がほとんどである。また3・4区の出土遺物は攪乱内からの出土で、7区以東からの出土遺物は極めて少ない。

M-6区では、奈良時代の遺物を含んだピットを1つ検出した。詳細は「ピット出土遺物」の項でふれる。N区以北も点々と部分的に掘削したが、すべて搅乱であった。

#### ② 遺物包含層出土遺物 (図8)

出土した遺物は縄文時代の土器・石器、弥生時代と思われる土器片、弥生時代・奈良時代の土器である。そのうち縄文時代の遺物がもっとも多い。全部で約200点の遺物が出土したが、このうち土器は細片が多く、実測可能な遺物は極めて少ない。

#### 縄文土器

縄文土器は、早期・前期・後期のものが出土している。細片が多く、実測可能な遺物は少ない。量的に最も多いのは条痕文土器である。1~4・7は条痕文の土器である。1は口縁部片で、口縁直下に横方向の突帯を2条持つ。突帯には刻み目を施し、口唇部にも刻み目を施している。口縁端と上の突帯の間及び両突帯の間には1~1.5cmおきに刺突を施している。外面には地文様として横方向の条痕文を、内面には左下がりの条痕文を施している。また内面には条痕の原体である貝殻を押し当てて、地文とは別方向に引いた跡が1ヶ所ある。胎土には金雲母を多く含んでいる。2はやはり地紋文に条痕を持つ土器で、外面に横方向に貝殻腹縁を押し当てて短く引いた文様を、上下三段施している。胎土には金雲母を含まず、白色粒子を多く含んでいる。3は口径はcmを測る小形の土器で、器壁は4mmと薄い。外面はナデで仕上げた上から貝殻腹縁を連続して押し当てて直線上にしたもののが三段施されている。内面は口縁部直下は横方向に、それより下は右下がりの条痕文を施している。胎土には金雲母を少量含んでいる。4は脚部片で、外器面は弧を描くように条痕を施し、内面には左下がりの条痕を施している。胎土には金雲母を多く含んでいる。7はわずかに外傾する口縁部片で、外面は無文であるが、内面には横走する条痕文を施している。口唇部1.5cm間隔で刻み目を施している。胎土には金雲母少量と白色粒子を多く含んでいる。

5・6は縄文を施している上器である。5は胴部片で、いわゆる磨消縄文である。外面に左下がりの細かい縄文を施し、破片上部の沈線から上はナデ消してある。裏面はナデである。胎土には白色粒子を多く含んでいる。6は外反対する口縁部片で、太い縄文を左下がりに施している。器面の凹凸が激しく、そのためか、文様の浅い部分や縄文のついていない箇所がある。胎土には金雲母をごく少量しか含まず、白色粒子を多く含んでいる。

8・9は底部である。8は底径13cmを測る。外底面にはクジラの脊椎骨状の痕跡が見受けられるが、明瞭ではない。内面は黒変している。胎土には金雲母を少量含んでいる。9は底径10.2cmを測

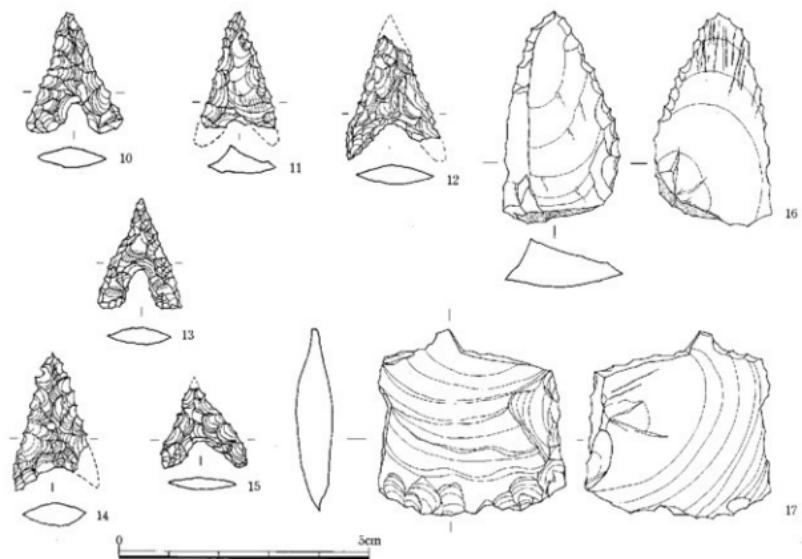
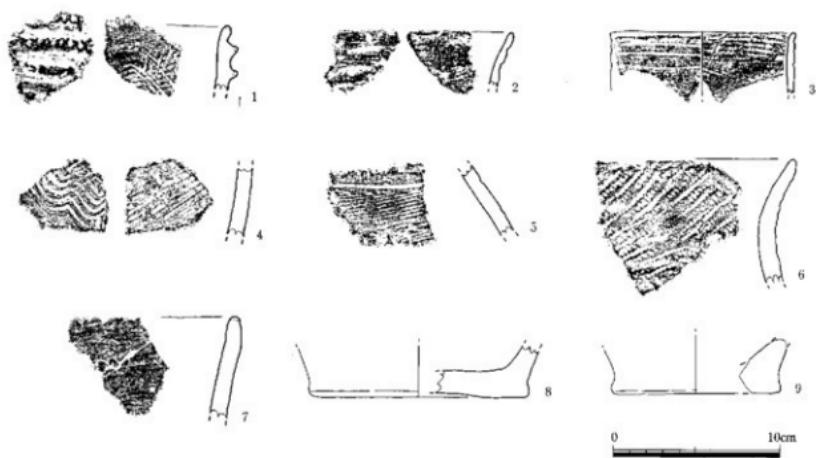


図8 大坪遺跡出土縄文時代遺物

る。胎土には多くの金雲母を含んでいる。

#### 石器

10~17は石鏃である。10は長さ2.4cm、幅1.9cm、厚さ4mmを測る。幅の太い脚を持っている。ハリ質安山岩製である。11は現存長2.3cm、幅1.5cm、厚さ5mmを測る。両脚部を欠失している。黒曜石製で、縦長剥片を利用している。12は現存長2.4cm、幅1.5cm、厚さ4mmを測る。ハリ質安山岩製で片脚と先端部を欠失する。脚は尖っている。13は黒曜石製で、長さ2.2cm、幅1.7cm、厚さ3mmを測る。先端部近くの側縁を剥離しすぎて、抉れている。抉り込みは深い。14はハリ質安山岩製で、長さ2.7cm、幅1.2cm、厚さ4mmを測る。片脚を欠失する。脚部の抉りは浅い。15は現存長1.6cm、幅1.5cm、厚さ2mmを測る。サヌカイト製で、長さが短い。16はスクレイバーで長さ4.2cm、幅2.3cm、厚さ1cmを測る。側縁上部にエッジを作り出している。17もスクレイバーで、両側を欠失している。現存長3.7cm、幅3.7cm、厚さ0.8mmを測る。下部にエッジを作り出している。

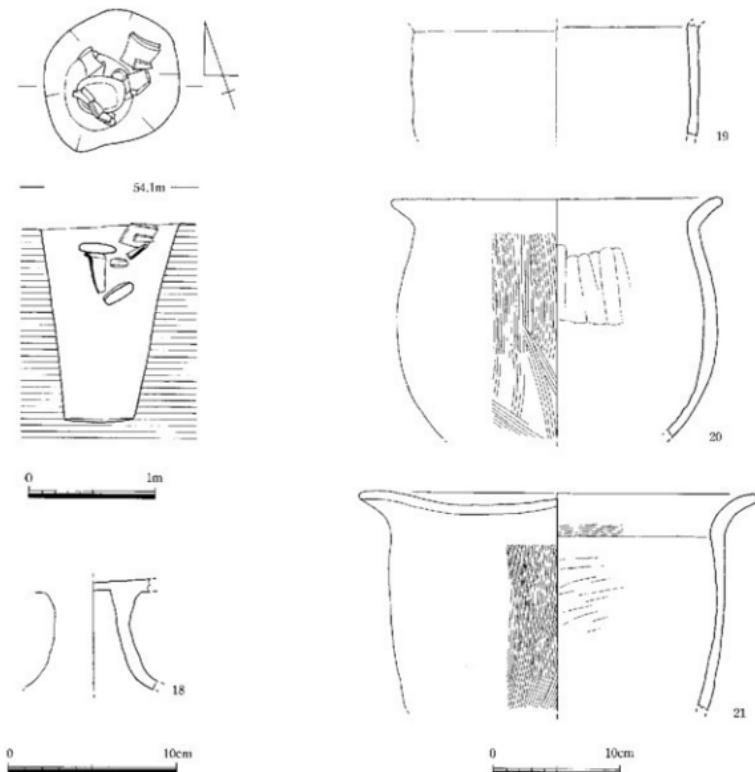


図9 大坪遺跡ピット及び同出土遺物

### ③ ピット及び同出土遺物(図9)

M-6区で検出したピットで出土した遺物である。ピットの上部より大きな甕の破片数点と高坏脚部や礫が混在した状況で出土した。いずれも奈良時代の土器で、それ以外の遺物は含んでいない。下半分には微細な土器片が入っているのみで、大形の破片は上部にしかなかった。

18はいわゆる赤焼き須恵器の高坏脚部で、円筒部の径4.6cmを測る。全面ロクロ調整で、胎土には微細な金雲母粒を多量に含んでいる。一見土師器のような色調であるが、調整や焼成は須恵器のものである。19は頸部径22.6cmを測る上師器の甕で、両面とも指によると考えられるナデで仕上げている。外面には頸部周辺にススが付着し、内面にはコゲが付着している。20と21も土師器の甕で、ゆるやかに外反する口縁部をもつ。胴部は20が丸みを帯び、21は直線気味である。口径は20が19.8cm、21が23.9cmを測る。調整はともに胴部は外面がタテハケ、内面はヘラケズリ、口縁部は内面がヨコハケの後ナデ、外面はヨコナデである。

## (4)まとめ

本文中で述べているように本調査区は全体が南からの堆積をくり返してきた土地で、その堆積上中に遺物を含んでいる。従って南側からは主に古い時期の遺物が出土し、北側の上の層には奈良時代の遺物を含んでいる。これらの層はいずれも砂層で、扇状作用によるものであろう。ただし北側の奈良時代の遺物包含層は上混じりの層で、後述する大坪南遺跡と同様に整地層の可能性もある。

出土した土器片はいずれも小片で、ローリングを受けているものもある。縄文土器の内、胎土から大きく2つにわけることができる。1つは金雲母を多く含んでいるもので、1~4・7の条痕文土器がそれにあたる。条痕は丁寧にひかれ、1の突帶の状況や4の弧を成している状況は前期の轟式土器に含まれよう。3の土器はやや異質であるが、バリエーションのひとつだろうか。7は全体の特徴から中期の阿高式系の土器と考えられる。

もう1種は金雲母をほとんど含まず、白色粒子を多く含んでいるグループで、5・6の縄文施文土器である。ともに後期のものである。底部は8が7と概ね近い時期のものと考えられる。9は金雲母を多く含んでいることから、前者の範疇に入りそうであるが、全体の形状から弥生土器の可能性も考えられる。

石器は石錐が代表する。形状からは縄文時代早期以前には少ない形状と言えるのみであろうか。他に使用痕ある剥片の断片等もあるが、利器は少なく、ほとんどが小チップ類であった。これらの縄文時代遺物は前述のように南から流入してきた層に含まれるもので、その生活遺構は南側に広がるものと考えられ、当地のすぐ南にある独立した砂礫台地またはさらにその南に広がる砂礫台地あるいは丘陵部の先端付近にその生活遺構を求めることが考えられよう。

一方調査区北側で検出した奈良時代の遺物を含むピットについて、大きな破片が穴の上部に集中的に入っている状況の理由は不明である。時期的には次章で述べる大坪南遺跡と同期のものであり、わずかながら、この時期の包含層と遺構があるのを確認したというにとどまる。広い意味で大坪南遺跡と同じ遺跡と言えよう。詳細は大坪南遺跡の項で述べたい。

## 4 大坪南遺跡第1次調査

### (1) 調査の経過と調査概要

発掘調査は平成9年4月7日に開始した。調査区は試掘の成果により、遺跡が申請地の南側に設定し、奈良時代の遺物包含層の上面までをバックフォーで除去した。その後旧住宅の基礎が溝状に入っていたり、人力でそれを除去すると地山面まで達したため、包含層の観察ができた。その結果包含層は2層に分かれることができた。その後調査区全体に4mスパンのグリッドを設定し、8mおきに土層観察用のベルトを残して、鎌で上層包含層の掘削を行った。遺物は各グリッド毎に取り上げた。上層包含層を下げるに、遺構があらわれる。遺構は土坑群であるが、下部包含層に掘りこんでいるため、遺構の床面や壁がわかりづらく、掘り過ぎた部分もある。またこの遺構面に置いたような状態で、須恵器壺の蓋と身、身と身、蓋と蓋がセットでかぶさった状態のものが計7セット出土した。掘り込みに伴うものは1セットだけで、他は掘り込みは確認できなかった。

遺構の調査が終了した後、上部包含層と同様な方法で下部包含層を掘り下げた。包含層掘り下げ終了後、若干の遺構を検出したが、これは覆上の状況等から上で確認した遺構の掘り残しと考えられ、この面での遺構はないと見て大過ないであろう。またE-1区で下部包含層の下から縄文土器を含む包含層を検出した。この包含層はD-1区からE-2区にかけての約10mのみで、出土したのも縄文前期の土器1個体分のみである。

調査は最後に一部地山面を掘削し下部を確認した後、6月7日に終了した。



図10 大坪南遺跡全体図

## (2) 層序 (図11)

基本的な土層は、耕土以下、黒褐色土（上部包含層）、褐色土（下部包含層）、地山で、下部包含層上面が遺構検出面である。両包含層の間に薄い層を挟んでいる部分もあるが、平面的には確認できなかった。E-1区では下部包含層のさらに下で、厚さ10cmほどの縄文時代前期の包含層を確認したが、この層は調査区外の南側に伸びているものの、調査区内の他地点では確認できなかった。

遺物包含層は調査区の東西両側では存在しない。西側は本来高いため、包含層が形成されていない。東側はこの包含層を切るように耕作土があることから、後世に段を作って破壊したものと考えられる。なお、この遺物包含層は整地層的に埋められた層である可能性が高いと考えられる。

遺物包含層より下の層は調査区西側は砂であるが、遺物包含層がある部分は概ねシルト層で、部分的に深掘りを行ったが、遺物は出土しなかった。

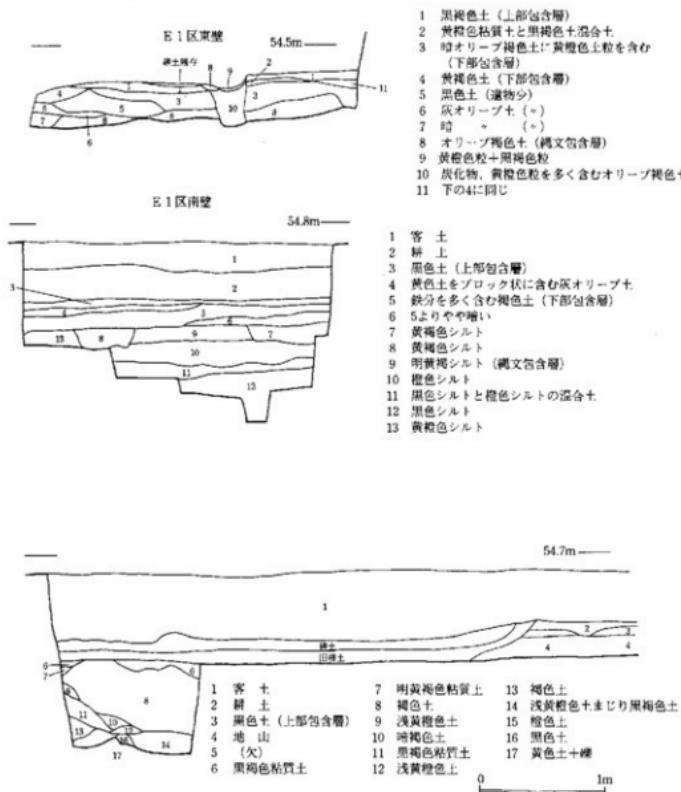


図11 大坪南遺跡土層断面図

### (3) 遺構と遺物

遺構は前述のとおり上層包含層を掘削した後、下部包含層上面で検出した。下部包含層撤去後の地山面でも遺構を検出したが、覆土の状況等から上面で検出しきれなかった遺構であろうと考えられる。検出した遺構は全部で021までの番号を付した。遺構一覧は下記のとおりである。

検出した遺構はすべて土坑に分類し、SKの記号を付したが、一部の遺構を除いて、そのほとんどの用途は分からなかった。

#### ① 土坑

##### SK 001 (図12)

C-4・5区付近で検出した。大半を掘乱で切られ、全形は分からぬ。確認した南北長約4m、東西長約2m、深さ約10cmを測る。覆土は黒褐色である。浅い割には比較的遺物が多くあったことから、住居の可能性も考えたが、判然としない。遺物は須恵器・土師器と少量の鉄滓があわせて大ビニール袋1袋程度出土した。

##### 出土遺物 (図13)

1は土師器の甕の口縁部片である。口径23.2cmを測る。胴部外面はタテハケ、内面は斜方向のヘラケズリで仕上げる。2・3は須恵器の蓋である。2はやや深みがあり、口径14.6cm、1.8cmを測る。やや黄色味を帯び、焼成が甘い。3は高さがほとんどない。口径15.7cm、器高0.9cmを測る。灰色を呈し、焼成は大変良い。4は須恵器の甕の底部で、高台径8.5cmを測る。5は須恵器の壺もしくは鉢の底部と思われる。高台径10.4cmを測る。6は須恵器の大型鉢の口縁部と思われる。胎土には3~4mm前後の砂粒を多く含んで粗く、色調はやや赤味を帯びて焼成が甘い。

##### SK 002 (図12)

C-4区で検出した。2基の切り合いの可能性も考えたが、土層が黒褐色土でほぼ同じことと、中央の深い部分を挟んで、両側がほぼ同じレベルであることから、1つの土坑とした。全長2.02m、幅1.17m、もっとも深い部分の深さ34cmを測る。断面形は概ね逆台形を測る。遺物は土師器・須恵器・鉄滓が大ビニール1袋ほど出土した。

##### 出土遺物 (図13)

7は須恵器の蓋である。口径が20cmに近い大形の蓋である。擬宝珠形のつまみはシャープきがない。色調は白色に近く、焼成は甘い。8も白色に近い色調を呈する碗で、高台径9cmを測る。高台は内傾している。9は小片であるが、内面に布目を持っている土器片である。布日の太さは破片の右と左で異なる。体部の破片で、わずかに外反しており、端部が厚くなっていることから底部近くの破片と考えられる。10は把手である。

##### SK 003 (図12)

調査区ほぼ中央のD-4区で検出した。東西両側を掘乱に切られている。土坑と言うよりは、溝状遺構に近い。現存部分の長さ約4m、最大幅1.13mを測る。断面形は浅い逆台形で、深さ20cmを測る。遺物は土師器・須恵器・鉄滓が大ビニール1袋ほど出土した。

##### 出土遺物 (図13)

11は須恵器の甕の底部である。高台径9cmを測る。胎土には2~4mm大の白色粒子をやや多く含み粗く、焼成もやや甘い。

##### SK 004 (図12)

D-5区北側で検出した。平面形は長方形に近く、長さ1.60m、幅0.58mを測る。断面形は浅い皿

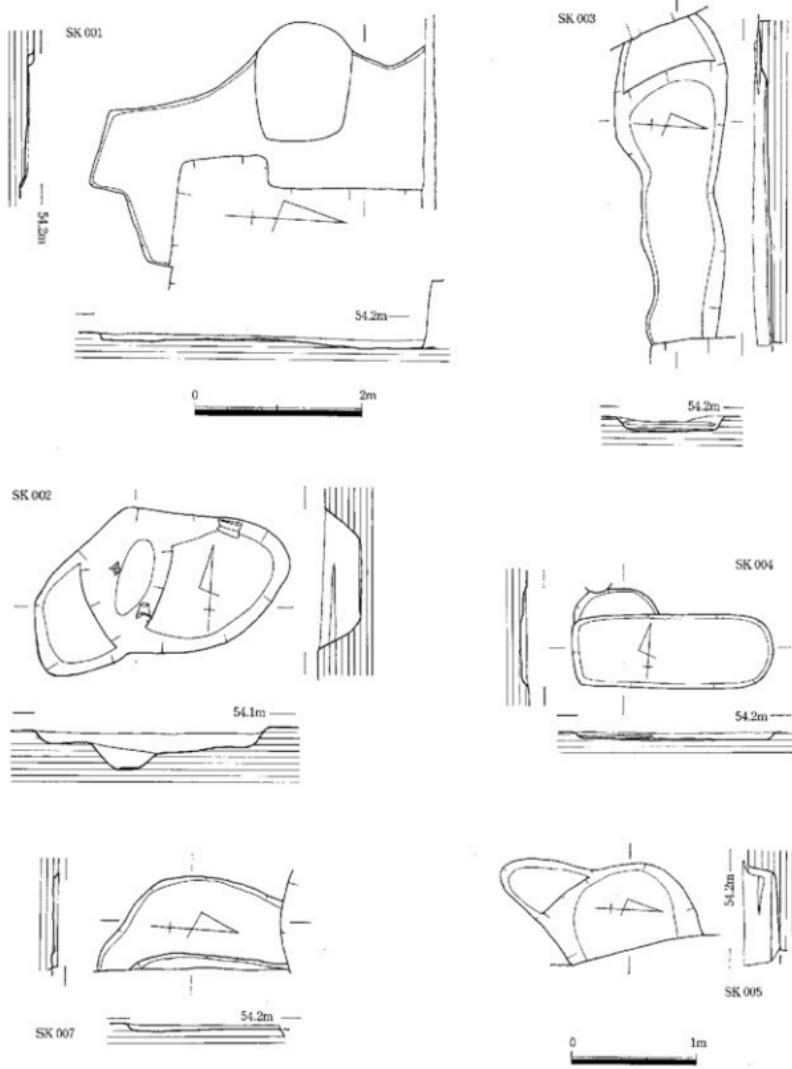


図12 大坪南遺跡SK001～SK007

状を呈し、深さ約5cmと浅い。遺物は土師器・須恵器が少量出土した。

#### 出土遺物（図13）

12は須恵器の蓋で、口径13.6cm、器高2.1cmを測る。かなり厚薄の激しい器壁で、ちいさな反りがつく。擬宝珠つまみは断面台形に近く、中央がわずかに突出する。

#### SK005（図12）

C-5区で検出した。東側は搅乱に切られている。西側に飛び出している部分は別の遺構かと思われる。その部分を除いた長さ1.15mを測る。断面形は箱形で、深さ27cmを測る。覆土は黒褐色を呈する。遺物は土師器・須恵器が少量出土した。

#### SK006 ごく小さな穴のため、ピットとして処理した。

#### SK007（図13）

A-5区で検出した。極めて浅く、遺構の東側は検出しきれなかった。あるいは遺構ではないかも知れない。確認部分は概ね円形を呈し、現存の最長部約1.50m、深さ8cmを測る。なお図の東側にある段は搅乱である。遺物は土師器・須恵器がごく少量出土した。

#### SK008（図14）

C-3区からD-3区にかけて検出した。検出当初は遺構の北側のもっとも深い部分のみを検出し掘り下げていたが、掘り下げる途中で状況がおかしいため、再度遺構検出し、最終的には図のよう

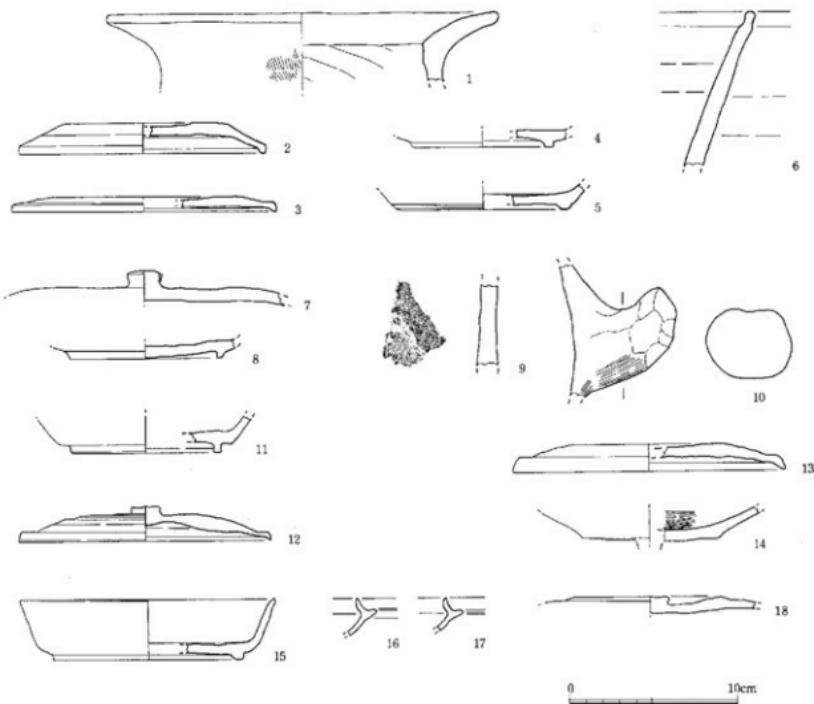


図13 大坪南遺跡SK001～SK011出土遺物

な状況で掘りあがった。ただし当初検出した図の北側部分と南側の溝上部分が別遺構であった可能性はある。前者の部分には焼土塊や木炭粒などとともに鉄滓が出土したため、製鉄関連遺構の可能性も考えたが、明瞭ではなかった。最終的な形状の長さ約3.7m、深さ20cmを測る。遺物は土師器・須恵器・鉄滓が少量出土した。

#### 出土遺物（図13）

13は須恵器の蓋で、口径16.2cmを測る。中央部分は凹んでいる。内面は灰白色を呈しているが、口縁部のみやや黒ずんでいる。14は土師器の高环の環部の破片である。外面はナデ調整で、内面にはハケメを施している。色調は外面が淡黄色、内面が黒褐色を呈している。図のとおりだと脚の径が細すぎ、あるいはもう少し径が大きいかもしれない。古墳時代の高环か。

#### SK 009（図14）

C-2区で検出した。略長方形の浅い土坑の北側に突出部がついた形をしている。長方形部には焼土塊が散在していた。製鉄関連遺構かと考えて精査したがわからなかった。長方形部の長さ1.28m、幅1.06mを測る。断面形は浅い皿状で、深さは7cm程度である。遺物は土師器・須恵器ビニール袋1袋と鉄滓がごく少量出土した。

#### SK 010 捣乱である。

#### SK 011（図14）

C-5区で検出した。南側は撓乱に切られ、北側は調査区外へと続いているため、全形は不明である。確認できた東西両側の壁間の距離は約4.5mを測る。深さ約20cmを測る。床面がほぼ平坦であることと、床面上から土器が出土したことから住居址の可能性も考えたが、検出部分が少なすぎるため、明確ではない。床面からピットや焼土等は検出しなかった。遺物は須恵器・土師器が大ビニール2袋ほどと少量の鉄滓が出土した。

#### 出土遺物（図13）

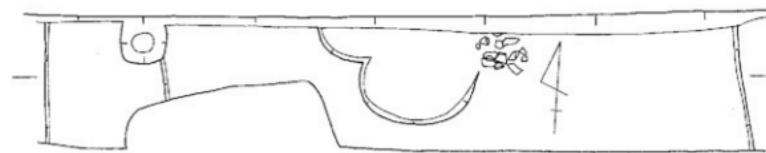
15は須恵器の高台环で、体部は直線的に外傾し、端部のみわずかに外反して丸くおさまっている。口径15.2cm、器高3.6cmを測る。16・17は古墳時代の須恵器环身の口縁部片である。受け部は余り長くなく、面もややだれています。古墳時代遺物は当調査区内では極めて数が少ない。18は須恵器の蓋で、中央部がまわりより低く、つまみの頭がかろうじて同じ高さになっている。器高は1cmを超えない。つまみは擬宝珠形で、中央部がやや高い。

#### SK 012（図14）

E-5・F-5区で検出した。SK 011と同じく、南側は撓乱に切られ、北側は調査区外へと続いている。SK 011とほぼ平行し、その間の距離約3mを測る。東西の両壁の間の距離約4mを測る。床面はほぼ平坦で、深さ約10cmを測る。床面からピット等は検出できなかった。ほぼ遺構内の全域から多くの土器が出土した。ただし床面からは少なくとも5cm以上浮いた状態で出土しており、遺構の廃棄以後に埋もれたものと考えられる。遺物は土師器・須恵器がコンテナ2箱出土した。

#### 出土遺物（図15）

19~21は須恵器の蓋である。いずれも高さは低く、口縁部に反りがある。21には擬宝珠形のつまみが付いている。口径は19が13.4cm、20が15.8cm、21が20.5cmを測る。22~25は須恵器の碗である。いずれも高台环である。高台の形は24がやや高くて細く外反している他は、低くて太い。高台と体部立ち上がりには1cm前後間があいている。22は口径12.6cm、器高3.7cm、23は口径13.7cm、器高3.9cm、24は口径14.9cm、器高4cm、25は口径18.1cm、器高4.6cmを測る。26は須恵器の壺もしくは鉢の底部で、底径12.2cmを測る。両面ともナデもしくはヨコナデで仕上げている。27・28は須恵器の皿



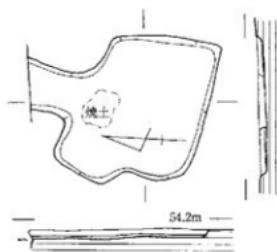
SK 011

54.2m



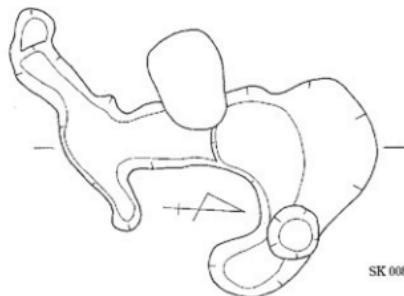
SK 012

54.1m



SK 009

0 1m



SK 008



0 2m

図14 大坪南遺跡SK008～SK012

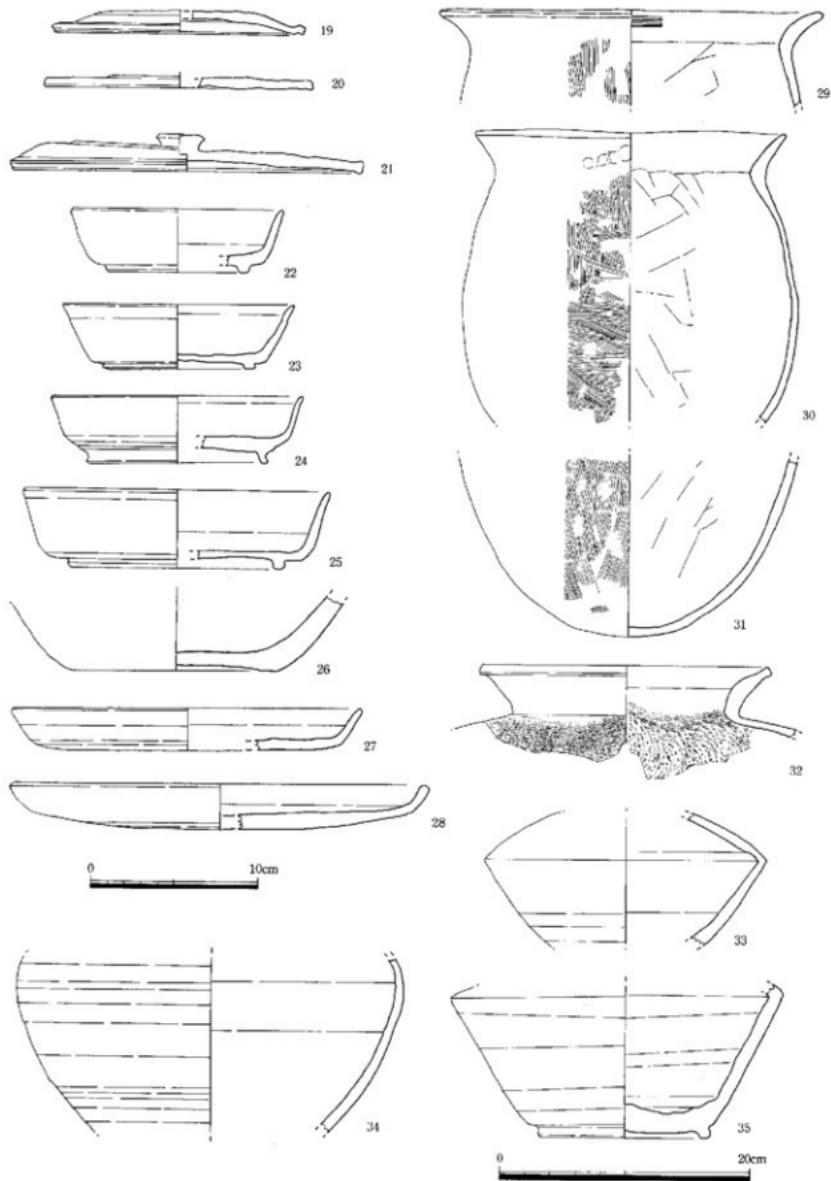


图15 大坪南遗址SK012出土遗物

である。27はほぼ平坦な底部であるが、28はゆるやかに彎曲する底部をもつ。27は口径20.7cm、器高2.5cm、28は口径24.8cm、器高2.7cmを測る。29~31は土師器の蓋である。ともに外面はハケメ、内面はヘラケズリで調整している。29は口径22.8cm、30は口径18.5cm、31は胴部の現存部径20.1cmを測る。32は須恵器の蓋である。口径17.4cmを測る。大きく「く」字に外反する口縁部と、平行に近い肩部を持つ。外面は木目に直行した横方向のタタキ、内面には同心円タタキを施している。33~35は須恵器の蓋で、33と35は長頸蓋である。33は算盤玉のような体部で、35はそれに比して、屈曲部から上の傾きが急である。34は丸い体部を持っている。33は胴部最大径16.9cm、34は同じく22.9cm、35は高台径10.2cm、胴部最大径19.7cmを測る。

#### S K 0 1 3 (図16)

A-5区で検出した。平面形は橢円形を呈し、長さ0.78m、幅0.56mを測る。断面形は浅い皿状で、深さ10cmを測る。内部に約15cm厚さ5cm前後の再結合滓が数点、焼上粒等があったが、床や壁が焼けている状況ではなかった。再結合滓には鍛造剥片を多く含んでいる。廃滓土坑か。遺物は鉄滓のほか、土器片がごく少量出土した。

#### S K 0 1 4 摂乱である。

#### S K 0 1 5 (図16)

H-4区で検出した。西側を摂乱に切られている。現存長1.05m、幅0.79mを測る。断面形は逆台形を呈し、深さ30cmを測る。覆土は黒褐色の上混じり砂である。遺物は土師器・須恵器約30点と鉄滓1点が出土した。

#### S K 0 1 6 (図16)

G-4区で検出した。北側を摂乱に切られている。現存の長さ1.06m、幅0.40m、深さ15cmを測る。遺物は土器片約10点が出土した。

#### S K 0 1 7 (図16)

G-4区で検出した。長楕円形のプランに一部突出部があり、あるいは切り合いを見のがした可能性がある。長楕円形部の長さ1.32m、幅0.69mを測る。断面形は逆台形で、深さ18cmを測る。東側は二段になっており、その段の上に長さ40cm、幅20cm、厚さ10cmの疊があった。遺物は須恵器・土師器片約30点が出土した。

#### S K 0 1 8 摂乱である。

#### S K 0 1 9 (図16)

D-5区で検出した。上面では把握できず、下部包含層撤去後に、地山であるシルト面で検出した。南側と西側の立ち上がりは検出できたものの、東側・北側立ち上がりは検出しきれなかった。確認部分の長さ約4m、深さ10cmを測る。中央部分を中心にレンズ状堆積が認められる。遺構東側上部には白色粘土・焼上を含む層があり、その下には焼上を充填したピットがあった。住居址の可能性も考えられるが、明確ではない。遺物は須恵器・土師器など約30点が出土した。

#### S K 0 2 0 (図16)

E-3区で、下部包含層撤去後に検出した。2段になっている。長さ約1m、幅0.92m、深さ65cmを測る。遺物は須恵器・土師器など約30点が出土した。

#### S K 0 2 1 (図16)

下部包含層撤去後に、E-4区で検出した。2段になっているが、2基の切り合いの可能性もある。長さ1.04m、幅0.92mを測る。断面形は逆台形で深さ30cmを測る。遺物は須恵器・土師器など約20点、鉄滓1点が出土した。

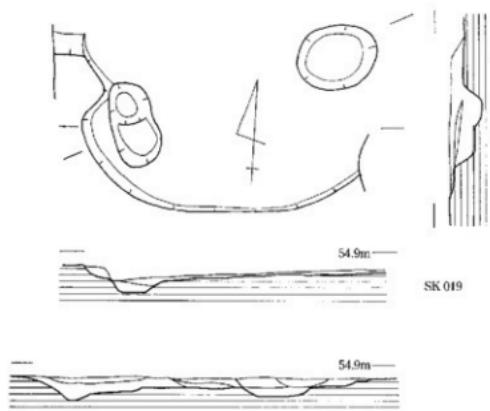
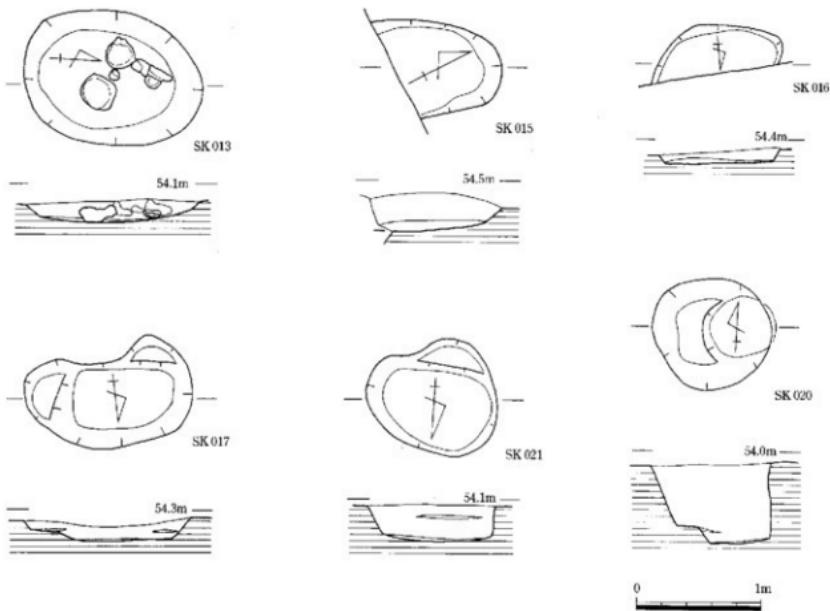


図16 大坪南遺跡SK013～SK021

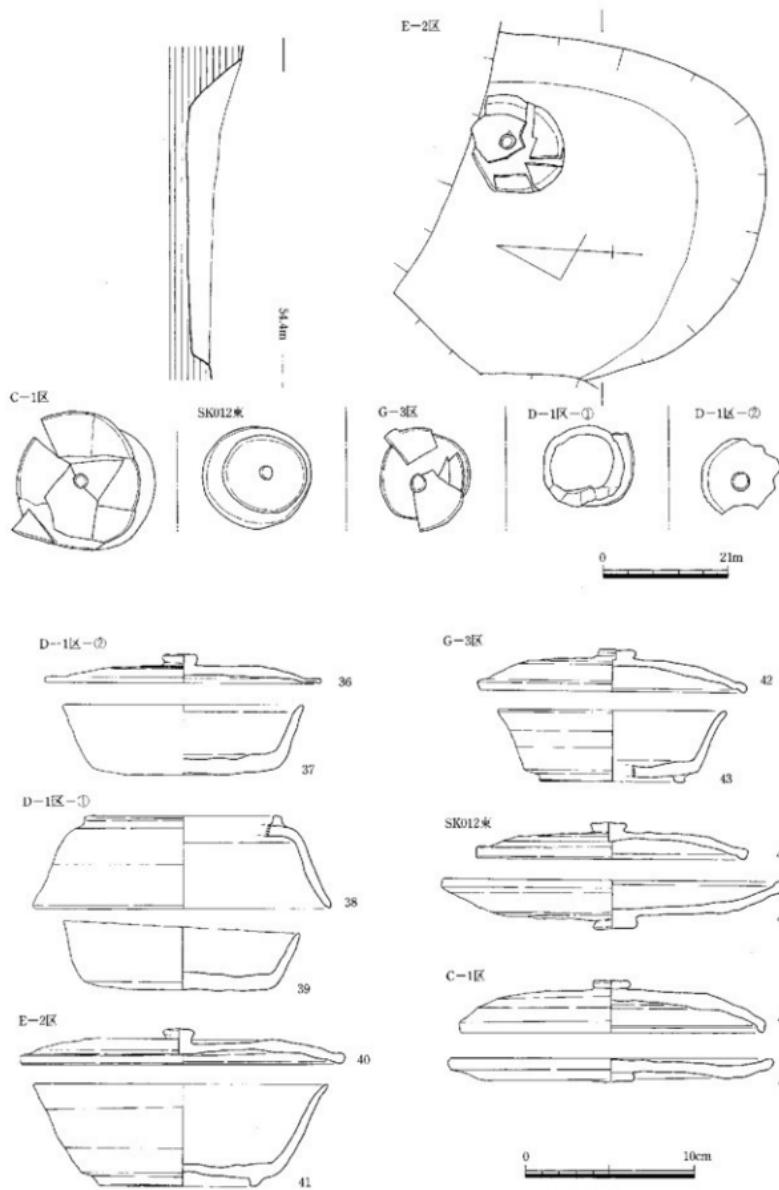


図17 大坪南遺跡土器セット遺構及び同出土遺物

## ② 土器セット遺構 (図17)

上部包含層撤去後、下部包含層上面で遺構検出を行ったが、この遺構面に乗った状態で土器の碗と蓋を組み合せたものが少なくとも 6 箇所あった。蓋検出時に掘り込みの確認作業を行ったが、区のピットの底に置かれたもの以外は掘り込みは確認できなかった。掘り込みが伴ったとしてもかなり浅いものと考えられる。土器の組みあわせは蓋と坏身が 3 セット、身と身が 1 セット、蓋と蓋が 2 セットである。いずれも蓋をのせた状態で検出した。中には SK 012 東側のセットのように上の蓋のほうがかなり小さいものもある。蓋と蓋の組みあわせでは内部の法量はかなり小さい。またこれらの他にも C-1 区周辺では完形に近い碗や蓋が出土しており、さらにこのセットがあった可能性が高い。なおすべてのセットで、上下 2 枚の上器内部からは、何も出土しなかった。

### 出土遺物 (図17)

各セット毎に述べる。出土遺物は 37・39 を除き須恵器である。36 と 37 は D-1 区出土のセット。36 は蓋で、高さは低い。口縁端は平坦部を成し、反りがつく。口径 16.4cm、器高 1.7cm を測る。37 は土師器の坏身で、高台はない。体部はほぼ直線的に外傾する。底部はわずかに丸味を帯び、器壁が 1 cm あり厚い。口径 14.4cm、器高 4.2cm を測る。38・39 は D-1 区出土で、坏の身と身のセットである。38 は高台付坏身で蓋として使用している。底部を欠失し、体部はわずかに外反する。口径 16.7cm、高台径 11.8cm、器高 5.5cm を測る。39 は上師器の高台のない坏身で、全体的に 37 に近い形状を成している。口径 14.1cm、器高 4 cm を測る。40・41 は E-2 区出土。40 は蓋で、全体の高さは低い。つまみは中央部がやや高い。口縁端はわずかに反り状に膨らむ。口径 19.2cm、器高 2.4cm を測る。41 は高台付坏で、体部はほぼ直線的に外傾し、口縁端部がわずかに外反する。高台断面形はほぼ台形を成す。口径 17.3cm、高台径 9.5cm、器高 6 cm を測る。42 と 43 は G-3 区出土。42 は蓋で、つまみは長方形に近い。口縁端部はわずかに反り状に作っている。口径 16cm、器高 2.5cm を測る。43 は高台付坏で、体部はゆるやかに外反している。底部は器壁が 1 cm 以上あり厚い。口径 13.6cm、高台径 8.6cm、器高 4.2cm を測る。44・45 は SK 012 東側で出土。44 は蓋で、つまみは擬宝珠形を成し、中央部がやや高い。口径 16.1cm、器高 2.2cm を測る。45 も蓋で、逆を向けて身として使用しているが、蓋と蓋の組みあわせのため、内部の容量は少ない。つまみは擬宝珠形であるが、中央部はあまり突出していない。口径 20.3cm、器高 2.9cm を測る。46・47 は C-1 区出土。46 は蓋で、つまみは長方形に近

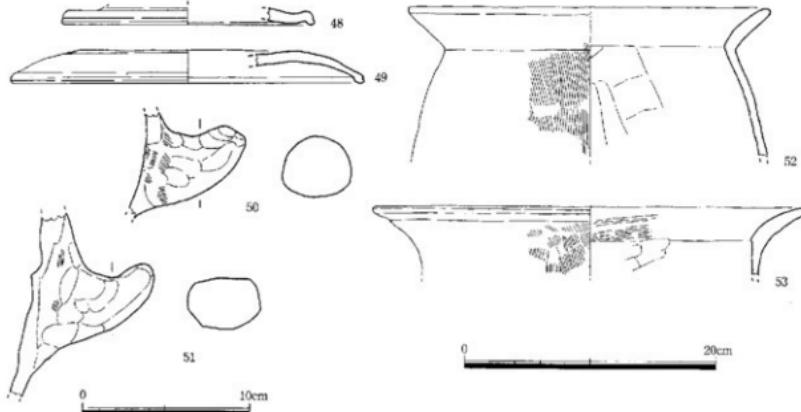


図18 大坪南遺跡ピット出土遺物

い。器壁が部分的に1cmを越え厚い。口径18.1cm、器高3.2cmを測る。47も蓋で、天地逆転させて身として使用している。つまみは擬宝珠形で、全体的に器壁が厚い。口径19.3cm、器高1.4cmを測る。

#### ③ ピット出土遺物（図18）

ピットから出土したものをまとめて述べる。なおピットは当調査区では量的に少なく、柱痕跡等が検出できたものもほとんどなく、建物なども確認できなかった。48・49は須恵器蓋である。48は口径15cm、49は20.8cmを測る。50・51土師器の把手である。52・53は土師器の蓋で、52は口径28.5cm、53は34.3cmを測る。52は口縁部と胴部の境が明瞭であるが、53は不明確である。ともに胴部外面にタテハケ、内面にヘラケズリを施している。

#### ④ 遺物包含層出土遺物

##### 縄文包含層出土遺物（図19）

E-1区を中心とした10m<sup>2</sup>ほどでのみ、下部包含層のさらに下から縄文時代前期の遺物を含んだ厚さ約15cmのオリーブ褐色土層を検出した。結果的には54の土器のみがこの層から出土した。口縁部を含んだ1/5周程の破片が文様面を下にして出土した。54は縄文時代前期の曾畠式系統の土器である。外面口縁部最上部と口縁部から6cmのところに横方向の刺突文を施す。その両刺突文間に約1cmおきに3列の刺突文で結んでいる。さらにその刺突文に囲まれた範囲内に約10本の横方向の沈線を施している。口縁部から6cmのところから下は長さ2cm前後の短沈線を連続して施している。また口唇部にも刺突文を施している。内面は指による粗いナデの後、横方向の貝殻条痕を施している。口縁部直下には短沈線を交互に綾状に施している。器壁は1cm前後とこの曾畠系の中では厚い。色調は外面は黒褐色、内面は赤褐色を呈している。胎土には石英・長石粒が多く含んでいる。外面にはほぼ全面、内面には破片の下部にススが付着している。復元口径32cm前後を測る。

##### 上部・下部包含層出土縄文時代遺物（図19）

奈良時代の2枚の遺物包含層から出土した縄文時代遺物をまとめて述べる。土器は確認できただけで10数片あるが、細片が多い。55は突帯文土器の口縁部片である。口縁端は尖り気味に作っている。両面に条痕文を施している。外面にはススが付着している。56は黒色磨研土器の浅鉢である。破片を見る限り、わずかに山形を成している。両面とも横方向の磨研を行っている。ススの付着はなく、胎土には微細な金雲母などを含むだけ精良である。57~59は底部の破片である。57は底径9cmで、平底、58は底径9.2cmでやや上げ底、59は底径8.2cmで上げを呈している。57は底に鯨の脊椎骨状の痕跡が認められるが、明瞭ではない。

60~63は石鏃である。60は長さ1.2cm、幅0.8cmを測る小形の石鏃である。小形の割に脚が長く、均整な形をしている。安山岩製である。61は長さ1.9cm、幅1.4cmを測る。漆黒黒曜石製である。62は長さ2.7cm、幅2cmを測る。ハリ質安山岩製である。63は先端部と脚の一部を欠失している。長さ3.9cm、幅1.5cmを測る。縦長の剥片を利用した剥片鏃である。黒曜石製である。64は安山岩製の横形石匙で、長さ10.8cm、身部の幅3.4cmを測る。横長の大きな剥片を利用し、つまみを作り出し、周縁部に加工を施している。

##### 下部包含層出土遺物（図20）

下部包含層からは概ねコンテナ1箱程度の遺物が出土した。65~85は須恵器である。65~74は須恵器の蓋である。つまみは2点のみで、比較的きれいな擬宝珠形を呈している。口縁端部は反りを作っている。高さはほとんど平坦なものから2cmほどの高さのものまで千差万別である。口径は13.9cm~16.2cmを測る。調整は天井部がヘラケズリ、体部が横ナデである。75は皿もしくは浅い坏で、口径13.4cm、器高2cmを測る。体部はほぼ直線的に外傾している。76~79は高台坏で、高台はやや

+ E-1区

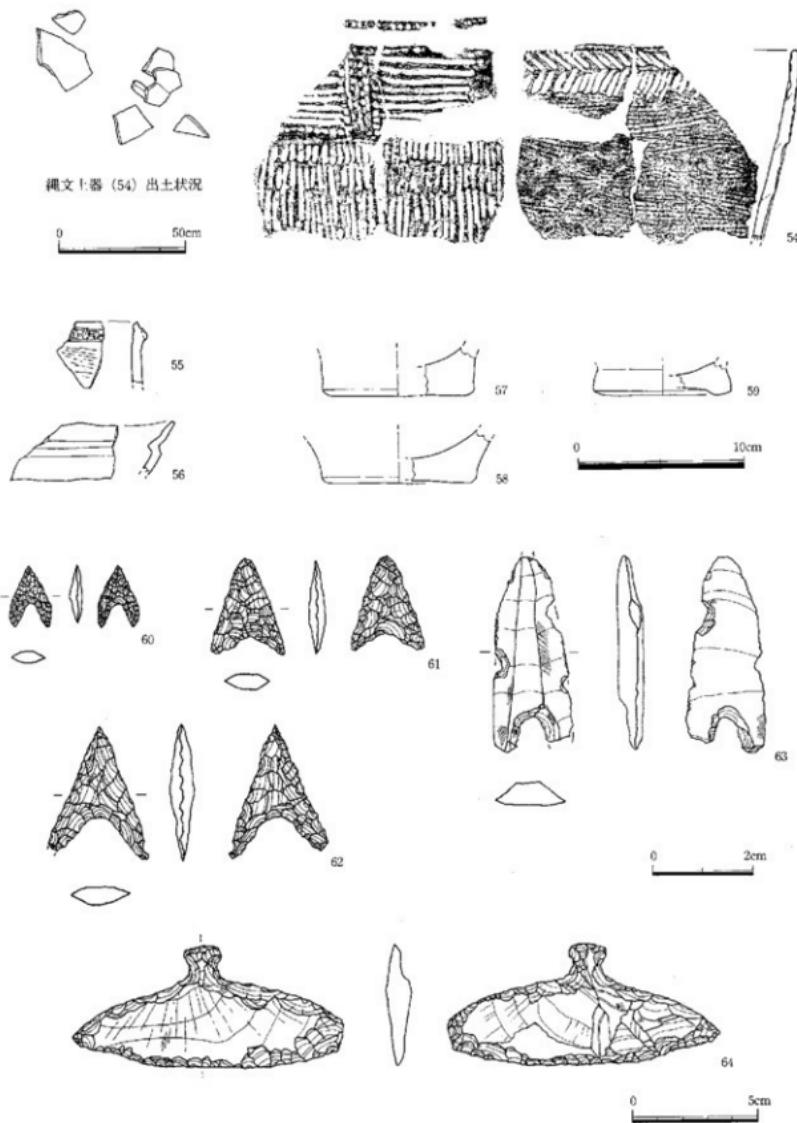


图19 大坪南遗址出土绳文时代遗物

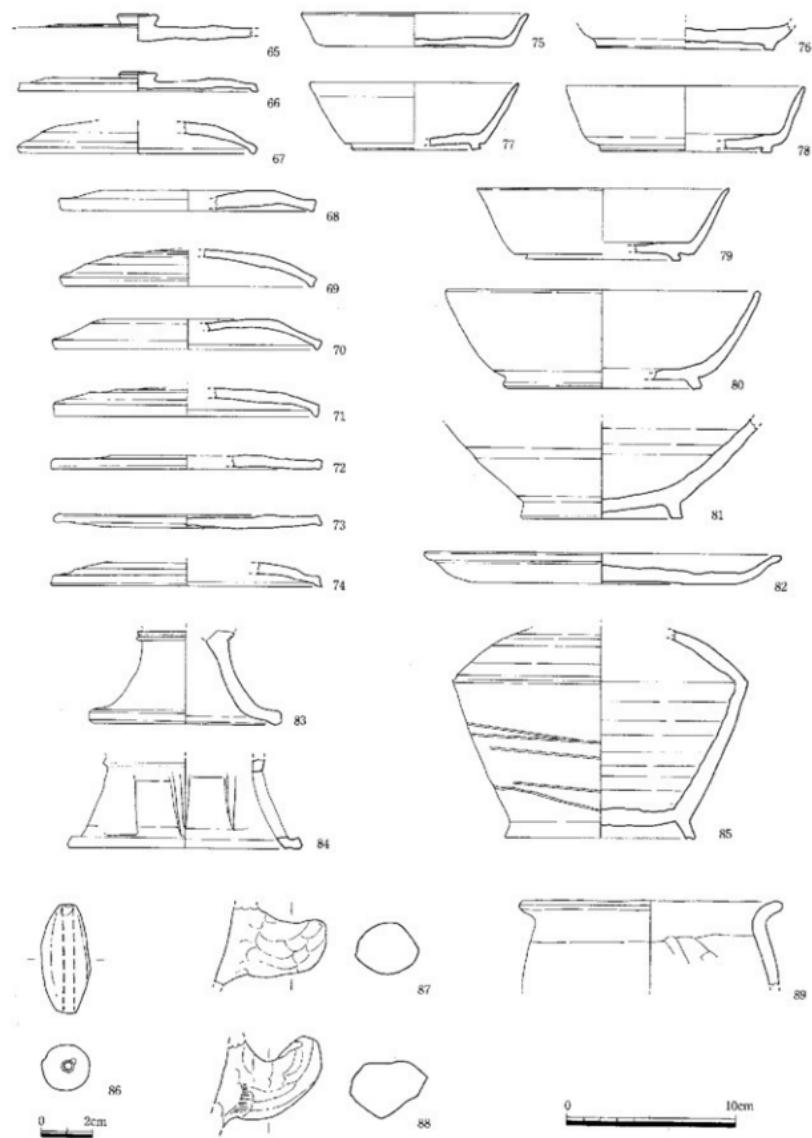


図20 大坪南遺跡下部包含層出土遺物

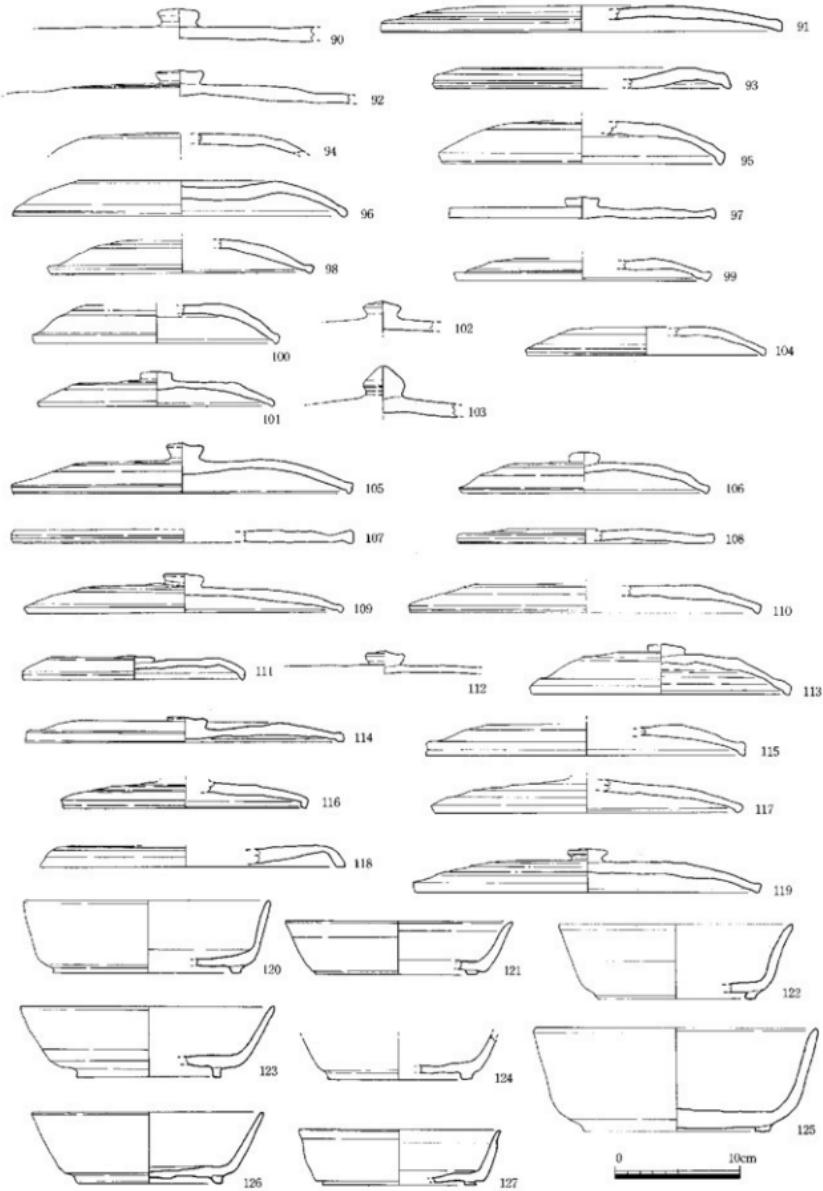


图21 大坪南遗址上部包含层出土遗物 I

外向きの台形を成し、高台から少し間をあけて体部に移行する。体部はほぼ直線的に外傾し、やや尖り気味の口縁部に至る。77は口径11cm、器高4cm、78は口径14.2cm、器高3.9cm、79は口径15cm、器高4.2cmを測る。80も高台壺と同形態だが、大形である。体部はやや丸みを帯び、高台は外向きで大きい。口径18.6cm、器高6.9cm、高台径11.7cmを測る。81は高台付鉢に分類できよう。基本的には高台壺と同じ形態だが、高台からそのまま体部へと移行している。高台は外向きで、大きい。高台径9.6cmを測る。75~81の調整は外底部の一部にヘラケズリがある以外はほぼ全面横ナデで仕上げている。

82は大皿で口径21.2cm、器高1.8cmを測る。口縁部は外へ飛び出し、端部を丸く作っている。83は高壺の脚部である。脚部径11.4cmを測る。いわゆる赤焼き須恵器である。84も脚部である。3片に分かれており、それぞれ接合しないが、同一個体と考えられる。脚部の破片で、透かしが計5ヶ所入るものと考えられる。透かしの形状は概ね台形を成している。円面鏡の脚部とも考えられるが、上部の破片がなくわからない。脚部径14cmを測る。85は長頸壺の体部で、最大径17.6cmを測る。高台は外傾し、高い。体部外面下半部にカキ目状の線が数条確認できる。86は土鍤である。長さ3.9cm、幅1.9cmを測る。87・88は土師器の把手である。89は土師器の甕で、口径15.6cmを測る。外面は磨滅のため調整不明である。

#### 上部包含層出土遺物 (図21~24)

上部包含層からは合わせてコンテナ30箱分の遺物が出土した。その多くは須恵器の蓋・壺・皿の小形のもので、次に須恵器・土師器の甕、高壺と続く。その他製鉄関係では羽口片の他、鉄滓も出土したが、鉄滓は小さな鋳治滓ばかりで総量もコンテナ2箱に満たず、さほど量はない。埴輪が出土している。以下、概略的に述べていく。

90~119は須恵器の蓋である。つまみは下部がくぼみ、天井部は平坦に近くわずかに中央部が高くなるものがほとんどである。103のみは中央部が高く断面形は三角形に近い。口縁端部は、96や100などのようにわずかに反り状になるものが多い。118は大きく反りを作っている。調整は天井部がヘラ削り、体部外面から内面にかけては横ナデである。104の内面に一見墨痕のように見えるものが付着しているが、明瞭ではない。91はもっとも大きく口径24cm、器高2cmを測る。93は天井が凹み、口径17.8cm、器高1.3cmを測る。95は器高が高く、器高2.6cm、器高17cmを測る。101はつまみの断面形がほぼ長方形を成し、口径14cm、つまみを含めた器高2cmを測る。105は口径20.3cm、器高2.9cmで、体部外面口縁部近くに日跡が残る。106は口径15cm、器高2.4cmを、109は口径19cm、器高2.4cmを測る。109にも目跡が残っている。111は口径13cm、器高1.4cm、113は口径15.4cm、器高3cm、114は口径19cm、器高1.6cm、119は口径20.4cm、器高2.6cmを測る。

120~140と142~144は壺で、この内142~144は土師器で、他はすべて須恵器の高台壺である。体部は垂直に近く立ち上がる120や125を除くとほぼ直線的に外傾している。122は体部下半が直立気味に立ち上がり、途中で屈曲して口縁部は外傾している。高台は断面形が略台形のものが多いが、高台下半が外に出ているもの（128・135・140など）、中に出ているもの（122・125・136など）、まっすぐなもの（123・131・132など）に分けられる。高台部と体部との距離は122のように5mm程度のものもあれば、123のように1.5cm近く離れているものもある。概ね5mm~1cm前後離れているものが多い。口径と器高は次のとおり。120は14.6cmと4.3cm、121は13.4cmと3.2cm、122は13.8cmと4.5cm、123は15cmと4.2cm、125は17cmと6.2cm、126は13.8cmと4.2cm、127は12cmと3.8cm、129は12.5cmと3.8cm、131は17.3cmと5.5cm、132は17.4cmと5.5cm、136は11.4cmと3.4cm、134は17.2cmと6cmである。142~144は無高台の壺で、142は口径15.2cm、器高3.9cmを測る。内面のかなりの部分にタール状のものが付着している。143は口径14.6cm、器高3.2cmを測り、やや肉厚である。144は口径13.4cm、器高3.1cm

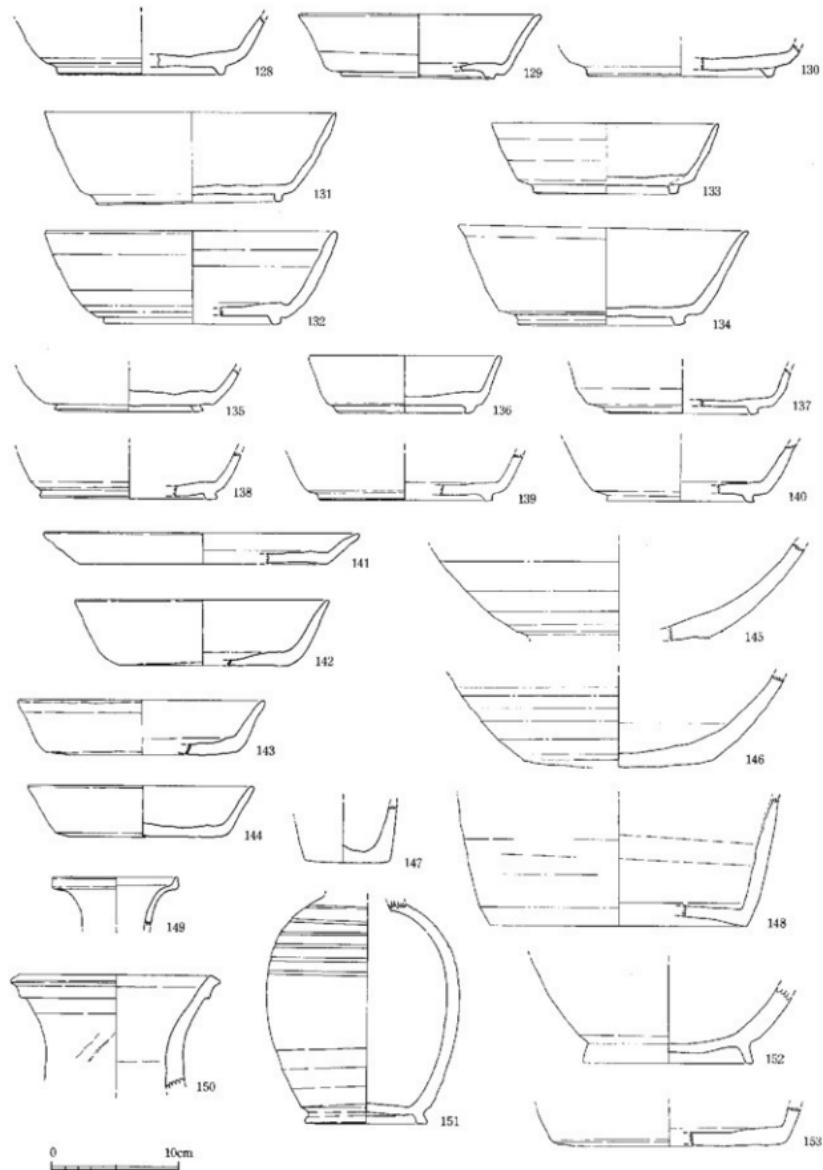


図22 大坪南遺跡上部包含層出土遺物Ⅱ

を測る。体部は器壁が薄い。いずれも体部は直線的に外傾し、口縁端を丸くおさめる。調整は外底部がヘラケズリで、他の部位は回転によるヨコナデである。141は皿である。口径18.8cm、器高2.4cmを測る。体部をヨコナデ、底部両面をナデで調整している。

145～153は壺の可能性の高い一群である。145は壺もしくは鉢で、高台が剥落している。その剥落部分の直径11.2cmを測る。外面はヘラケズリ、内面はナデで仕上げている。146も鉢もしくは壺であろう。現存部の最大径22cmを測る。152もこれらの形態に近く、高台壺壺と思われる。高台は壺類に比して高く、外に向かってまっすぐ伸びている。高台径10.2cmを測る。調整は外面は回転ナデであるが、内面はヘラナデである。148・153は瓶状の器形をもつと思われる。148は上げ底で、底径15.4cmを測る。調整は外面がヘラケズリ、内面がナデもしくはヨコナデである。153は底径14.2cmで、平坦な底部である。147は小形の瓶か。底径5.6cmを測る。149・150は長頸壺の口縁部である。149は口縁端を上部につまみ上げている。口径7.3cmを測る。150は口縁端を箆ブラシ状に肥厚させている。口径12.4cmを測る。151はやや球形気味の体部をもつ長頸壺である。高台径7.3cm、胴部最台径10.9cm、現高13.5cmを測る。体部上部には沈線状に5本施している。

154～157は須恵器の壺である。154・155は大甕の口縁部片で、ともにするどく屈曲した口縁部片である。156は頸部径28.8cmを測る。外面には平行タタキ、内面には同心円タタキを施している。157は頸部径14cmを測る。調整は両面とも回転ナデである。159～164は高环である。159・162・163などは、外面に粘土巻き上げの痕跡が明瞭に残る。内面はシボリもしくはナデ。161は他に比して径が太い。164は脚部片で、端部を下につまみ出している。脚部径8.7cmを測る。158・165～167は土師器の壺である。「く」字形に曲がる口縁部片で、調整は胴部外面がタテハケ、内面ヘラケズリ、口縁部は外面がヨコナデ、内面はヨコハケのちヨコナデである。胎土には石英・金雲母を多く含む。口径は158が18.1cm、165が27.6cm、166が30.1cm、167が33.6cmである。

168～171は土師器の把手である。壺もしくは瓶につくものであろう。いずれも指による調整痕のままである。172～174は内面に布目痕のある土器片である。7～8mmの器壁で、内面に細かく織られた布痕がつき、比較的径の小さな土器片である。上部包含層や遺構内から、全部で10数片出土している。外面はナデ調整である。胎土は比較的精良で、赤い鉱物を含んでいる。175は坩堝状土器品である。2cmを超える器壁を持ち、内面にガラス化した鉱物が貼り付いている。全体かなり焼けている。口径10cm、器高5.5cmを測る。ガラス化した部分については、付編として大澤氏の玉稿を賜っているので、参照していただきたい。176～179は鞆の羽口の破片である。全部で10片近くが出土しているが、いずれも小さな破片で、炉との接合部分の破片ではなく、途中の物ばかりである。180は石製紡錘車である。径3.8cm、孔径0.8cm、厚さ1.9cmを測る。滑石系の石材である。181～185は土鍤である。181は長さ4.3cm、径1.4cm、孔径0.3cm、182は長さ4.5cm、径1.2cm、孔径0.5cmを測る。182～185はいずれも先端部を欠失している。

#### 搅乱出土遺物（図24）

搅乱内からもかなり多くの遺物が出土した。そのうちのごく一部、代表的なものののみ記載する。

186・187は須恵器の蓋である。ともに擬宝珠形のつまみを持ち、口縁端部に反りを有している。186は口径12.9cm、器高1.8cmを測る。188・190は須恵器の高台环である。188は体部がわずかに外反している。高台断面は台形に近い。口径15.8cm、器高2.9cmを測る。190は高台が外に広がっている。高台径5.9cmを測る。189は須恵器の皿である。口径21cm、器高1.9cmを測る。191は須恵器の蓋である。体部中央の上下に輪っかがつく。192は須恵器の把手である。把手は手による整形のままである。内面には深い同心円文の當て具痕がある。

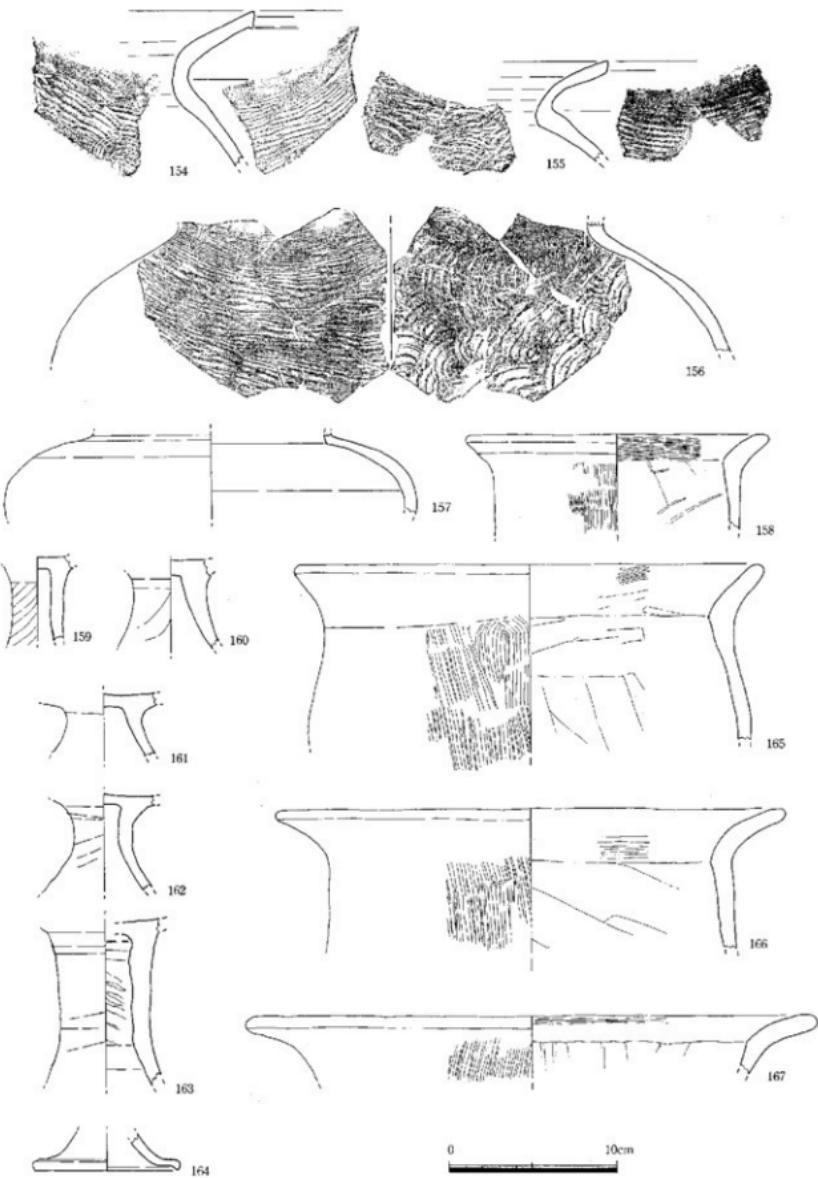


图23 大坪南遗址上部包含层出土遗物Ⅲ

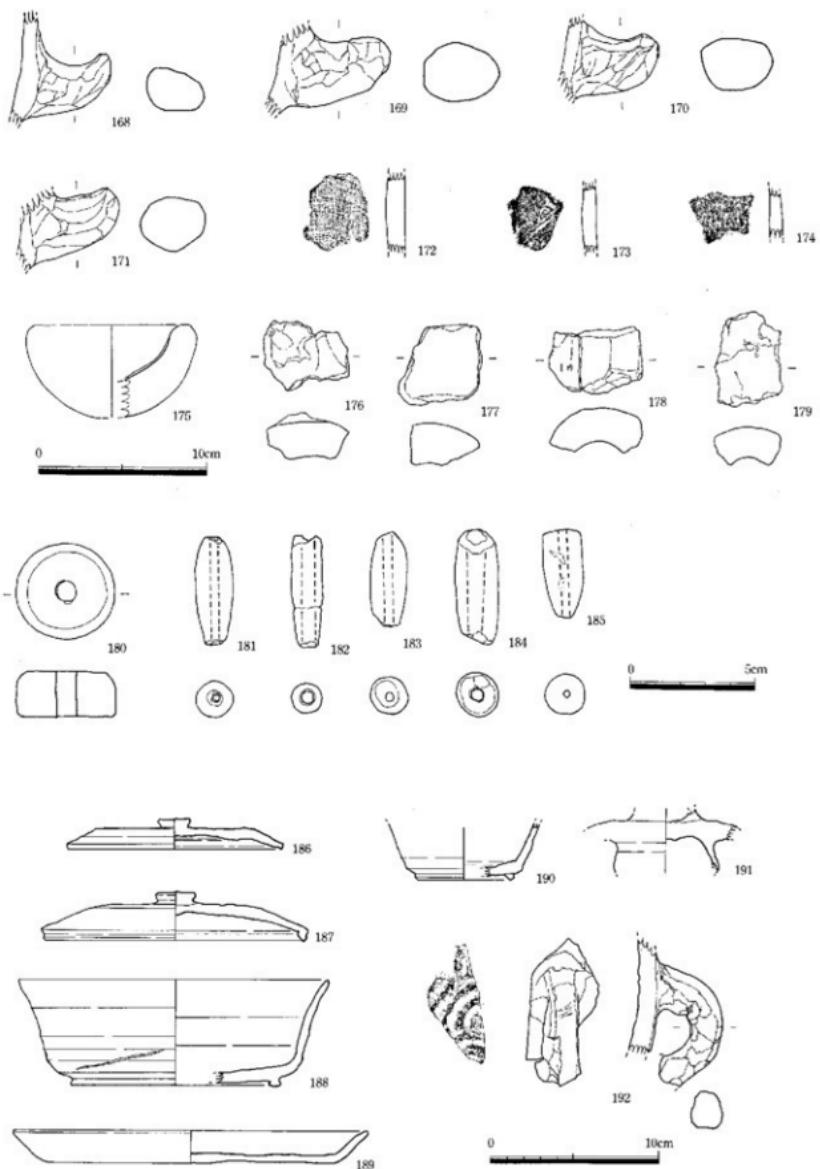


図24 大坪南遺跡上部包含層出土遺物IV・擾乱出土遺物

## (4) まとめ

当遺跡は縄文時代前期と奈良時代の包含層が調査の中心となり、遺構は住居址の可能性のある2基を除くと土坑ばかりで、一部は製鉄関連の可能性が考えられるものの、用途はほとんどわからなかった。以下、いくつかの注意点を記して、まとめとしたい。

### ① 縄文時代の遺物

小面積ながら縄文時代前期の遺物包含層を検出した。包含層は南側隣地へと続いており、立地的に見ても南側に該期の生活址が存するものと考えられる。大坪遺跡でも同様に南側からの流れ込みが考えられている。包含層から出土したのは曾畠式土器である。その特徴は、器壁が厚い、沈線が短く太い、内面に条痕を施している、等であり、典型期の曾畠式土器とはやや異なっている。類例は福岡県岡垣町元松原遺跡などで出土しており、曾畠式の最終段階に位置付けられている。今後の南側部分の調査に期待したい。他に縄文時代遺物として、黒川式土器片、突帯文土器片、後期の剥片鐵などが出土している。大坪遺跡出土遺物とあわせると、少量ずつではあるが、縄文時代を網羅するように出土しており、今後の内野地区で縄文時代の調査に期待がもてよう。

### ② 奈良時代の包含層

奈良時代の包含層は2枚検出した。下の包含層には遺物はさほど多くはないが、上の包含層からは大量の遺物が出土した。両包含層から出土した須恵器はほぼ同タイプのものが多く出土している。蓋はやや崩れ気味の擬宝珠形で、口縁端部の反りはわずかに残存している。坏身は体部がほぼ直線的に伸び、高台は數タイプあるが、断面台形に近いものが多く、体部立ち上がりとは1cmほど間がある。以上の特徴から8世紀の中頃に近い後半の時期設定ができるよう。包含層自体は整地層の可能性が高いと考えられるが、積極的な証拠はない。遺構はこの2枚の包含層の間に、下部包含層撤去後の地山面で検出した。後者は本文中でも述べたように、遺構内部の覆土の状況等から前者の取りこぼしと思われ、包含層形成前には本来遺構はなかったものと考えられる。一方、前者についても、上部包含層撤去後に遺構を検出したものの、上部包含層の上面から遺構を掘り込んでいる可能性も考えられるが、掘り込みを伴わない土器セット遺構が、下部包含層の上面に置いたような状態で検出していることから、下部包含層形成後に何らかの行為があったことは間違いない。そのように考えれば、遺構群が包含層にサンドイッチされた状態でも問題はないかも知れない。

### ③ 製鉄関連について

今回の出土遺物と遺構群の特徴を強いて挙げるならば、鉄滓・鞴の羽口の出土と鉄滓や再結合滓が含まれる遺構が存在するということであろう。後者には焼土塊や木炭粒も含まれている。ただし、壁面が焼けた遺構がないこと、焼土も床面に密着して遺存しているわけではないことから、ここで製鉄・鍛冶をしているわけではなく、それらを廃棄した遺構であると考えた方が良いであろう。鉄滓は今回の調査全体でコンテナ3箱ほどで、しかも小さな鍛冶滓ばかりであった。あるいは包含層全体がそういった“ゴミ”を大量に含んだものかも知れない。ひとつ特筆できるのは坩埚状の土製品が1点含まれていることである。坩埚であるならば、この時期のものとしては珍しい。ただし付着しているガラス質については、付編にあるように銅は検出されておらず、坩埚ではなく取鍋であろう、との結論をいただいている。他の滓などの遺物を見ても銅とおぼしき遺物はない。いずれにしろ当調査区のおそらく南側に、鍛冶を中心とする工房が存在するものと思われる。

## 付編

### 大坪南遺跡出土坩堝（取鍋状）付着溶融物の金属学的調査

大澤正己

#### 概要

8世紀中頃に比定される大坪南遺跡第1次調査で出土した坩堝付着溶融物の顕微鏡観察を行った。鉱物組成は、非晶質珪酸塩に微小マグネタイト（Magnetite:Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>）を少量晶出する。直接非鉄合金類の残渣物は検出されなかったが、これに類する溶融合金を注入した容器と推定される。

#### 1 いきさつ

大坪南遺跡は、福岡市早良区内野に所在する縄文時代と奈良時代の複合遺跡である。この奈良時代の廐津土坑や包含層から鐵滓や羽口、坩堝など手工業生産関連遺物が出土している。そのうちの坩堝状容器の用途についての調査依頼を受けた。

#### 2 供試材と調査方法

坩堝状容器は、口径10cm、器高5.5cm、肉厚2.2cmを測る。この容器内に薄く溶融したガラス質付着物を、ニッパーにて小片を数点掻き取り、ベークライト樹脂に埋め込んだ後、研磨して光学顕微鏡観察を行った。

#### 3 調査結果

Photo.1の①～⑨に示す。①～③が容器内に付着した溶融物の主要鉱物相である。暗黒色ガラス質スラグのみで、メタル粒は未検出である。②③の黒色円形は気泡である。次に④～⑨は、局部的に点在する鉱物相で、暗黒色ガラス質スラグ中に、微細な白色多角形結晶のマグネタイト（Magnetite:Fe<sub>3</sub>O<sub>4</sub>）が晶出する。これらは、主に胎土中の鉄分が溶融した析出物である。製鉄炉や鍛冶炉、または羽口など粘土類の高温溶融したものから検出される鉱物組成と同じものである。

古代の鍛冶工房では、鍛冶炉を利用して銅合金の溶融作業を行なう例がありうる<sup>①</sup>。今回の坩堝状容器は、その様な事例に準ずるものではなかろうか。ただし、その痕跡はなかった。

ここで、この椀形容器は坩堝といいきてよいものか躊躇している。坩堝は金属を溶融する耐熱性の容器であり、内容物は出来るだけ空気酸化を避ける造りでなければならぬ。この椀形は、取鍋の機能を考えた方がよさそうである。

#### 注

- ① 神奈川県平塚市所在、坪ノ内遺跡出土の椀形容器は、銅合金溶融作業に関連した遺物であった。報告書準備中。

(1) OUT-1  
取鋼付着溶融物

- ①×400 ガラス質スラグ  
②×100 ③×400  
取鋼胎土ガラス化  
④⑤⑧×100 ⑥⑦⑨×400  
付着溶融物  
ガラス質スラグ中のマグнетイト

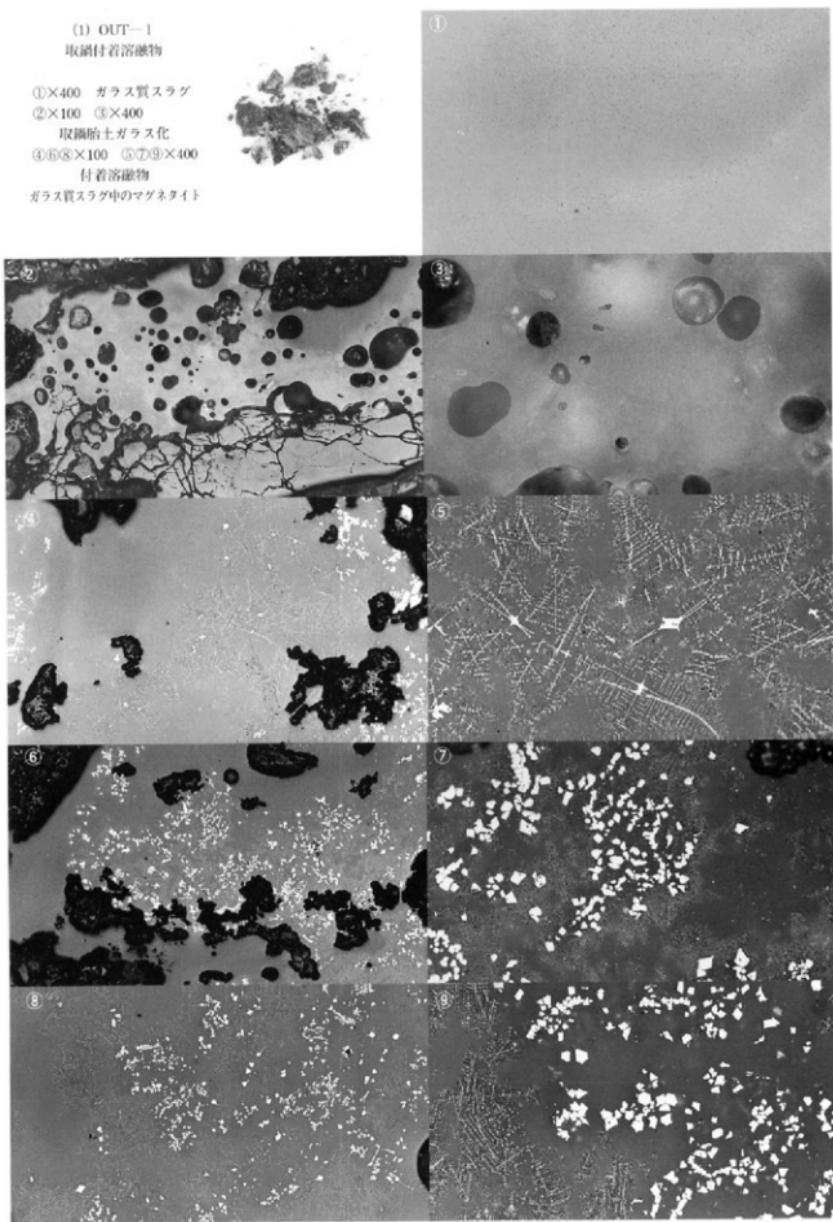


Photo. 1 取鋼付着溶融物の顕微鏡組織

図版1



(1)



(2)



(3)

(1) 大坪遺跡調査区全景 (2) 同J-3区上層断面 (3) 同C-8区全景



(1)



(2)



(3)



(4)

(1) 大坪遺跡B-10区全景 (2) 同ピット遺物出土状況 (3)・(4) 同包含層遺物出土状況

図版 3



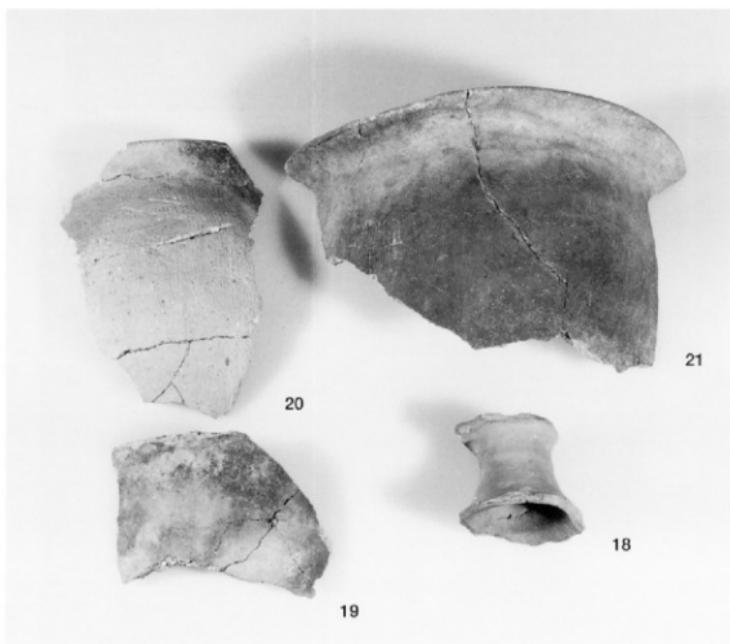
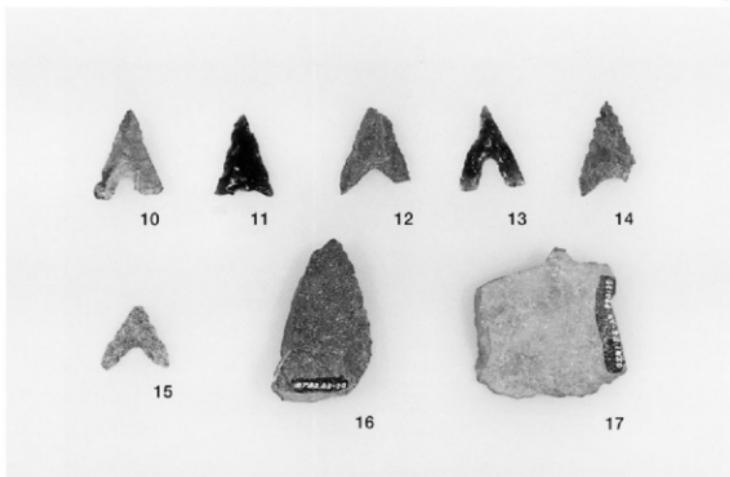
(1)



(2)

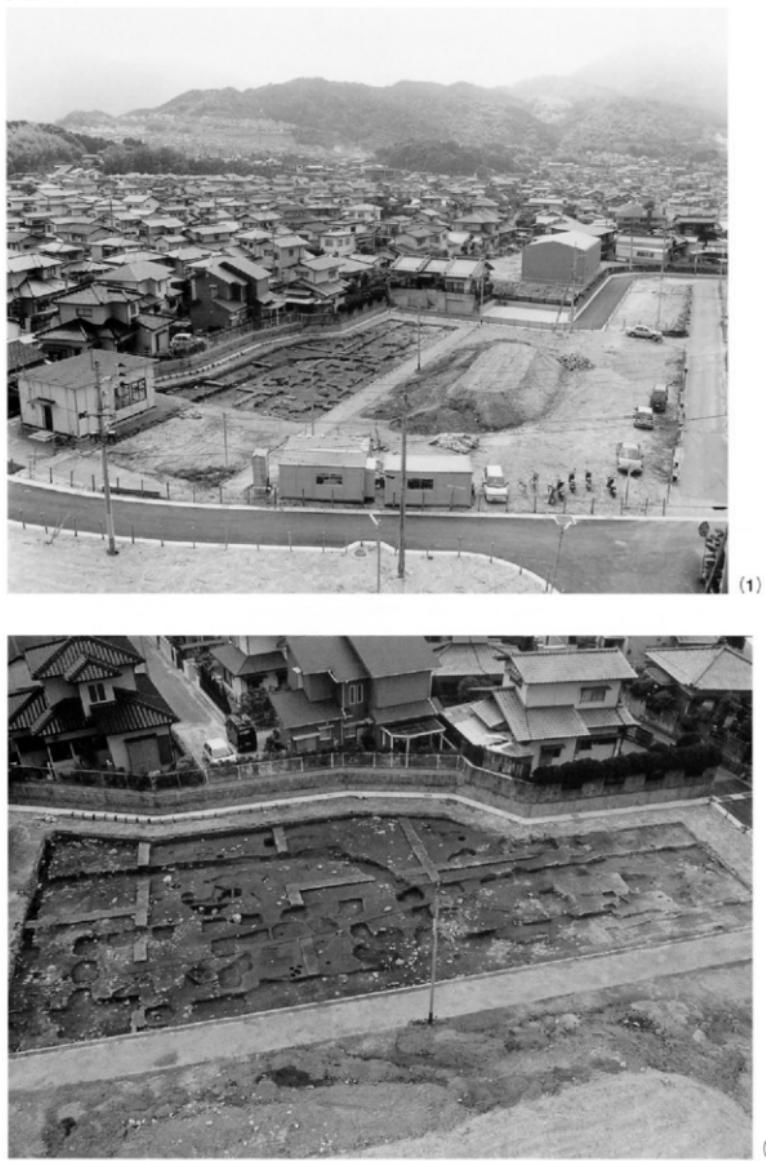
(1) 大坪南遺跡から見た大坪遺跡 (2) 大坪遺跡出土遺物 I

图版 4



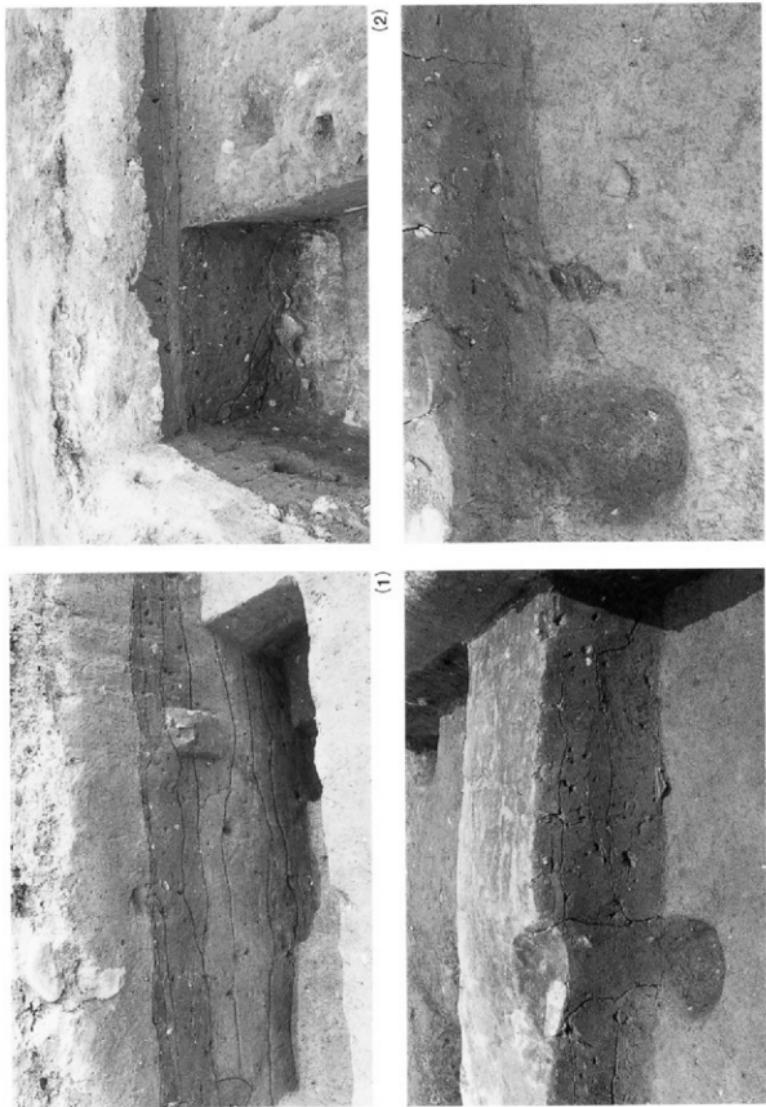
大坪遺跡出土遺物 II

図版5



(1) 大坪南遺跡近景 (2) 同全景

図版6



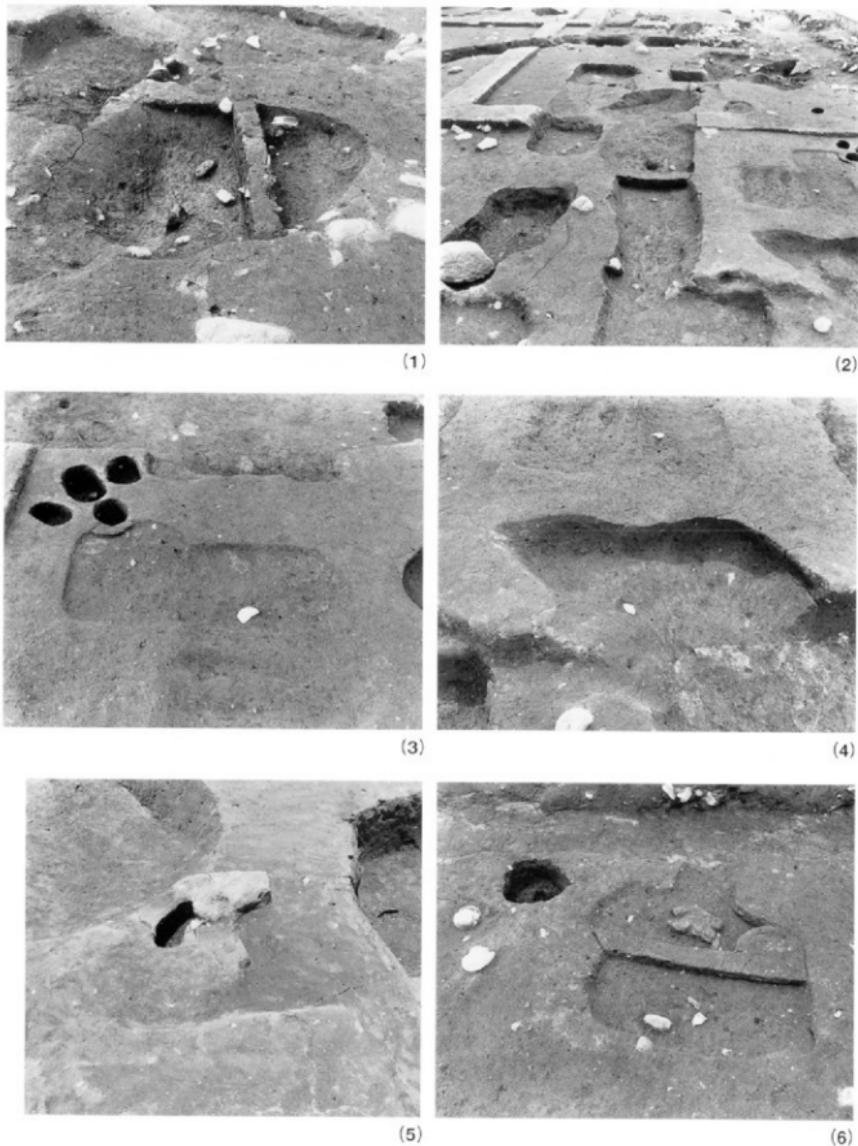
(1) 大坪南遺跡土層断面

(3) 同E-1区東壁土層断面（縄文層）

(2) 同調査区最東端土層断面

(4) 同縄文層遺物出土状況

図版7



大坪南遺跡の土坑 I

(1) SK 002 (2) SK 003 (3) SK 004 (4) SK 005 (5) SK 006 (6) SK 009

図版 8



(1)



(2)



(3)



(4)



(5)



(6)

大坪南遺跡の土坑Ⅱ

(1) SK 010 (2) SK 011 (3) SK 012 (4) 同遺物出土状況 (5) SK 013 (6) SK 014

図版9



(1)



(2)



(3)



(4)



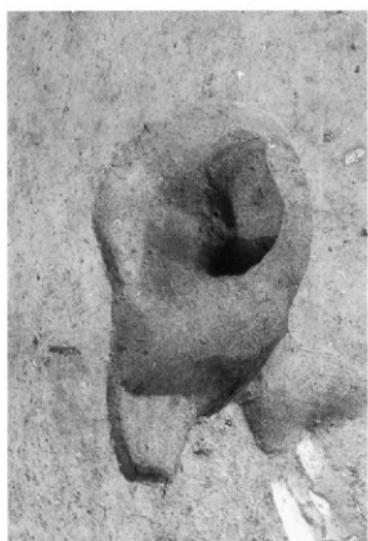
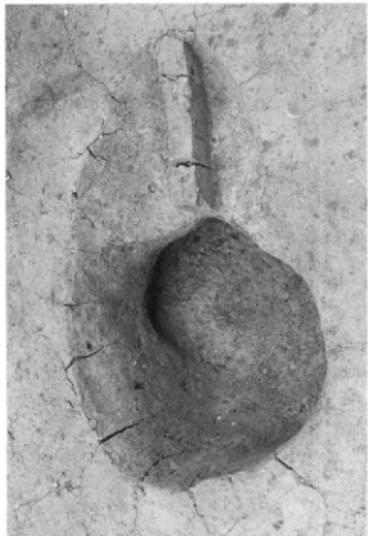
(5)



(6)

大坪南遺跡の土坑Ⅲ

(1) SK 015 (2) SK 016 (3) SK 017 (4) SK 018 (5) · (6) SK 019

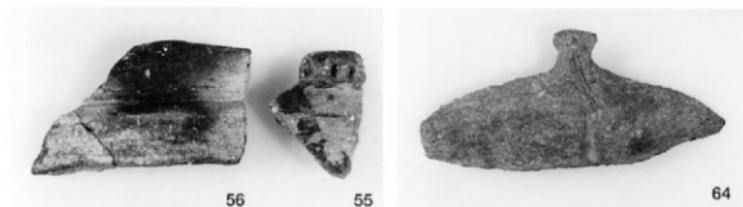


大坪南遺跡の土坑IV・同土器セット遺構

(1) SK 021 (2) SK 022 (3) E-2区土器セット遺構 (4) SK 012東側土器セット遺構



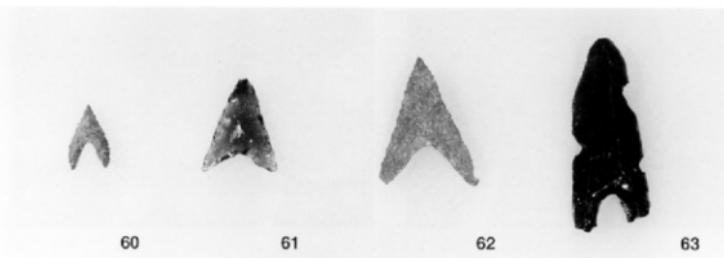
54



56

55

64



60

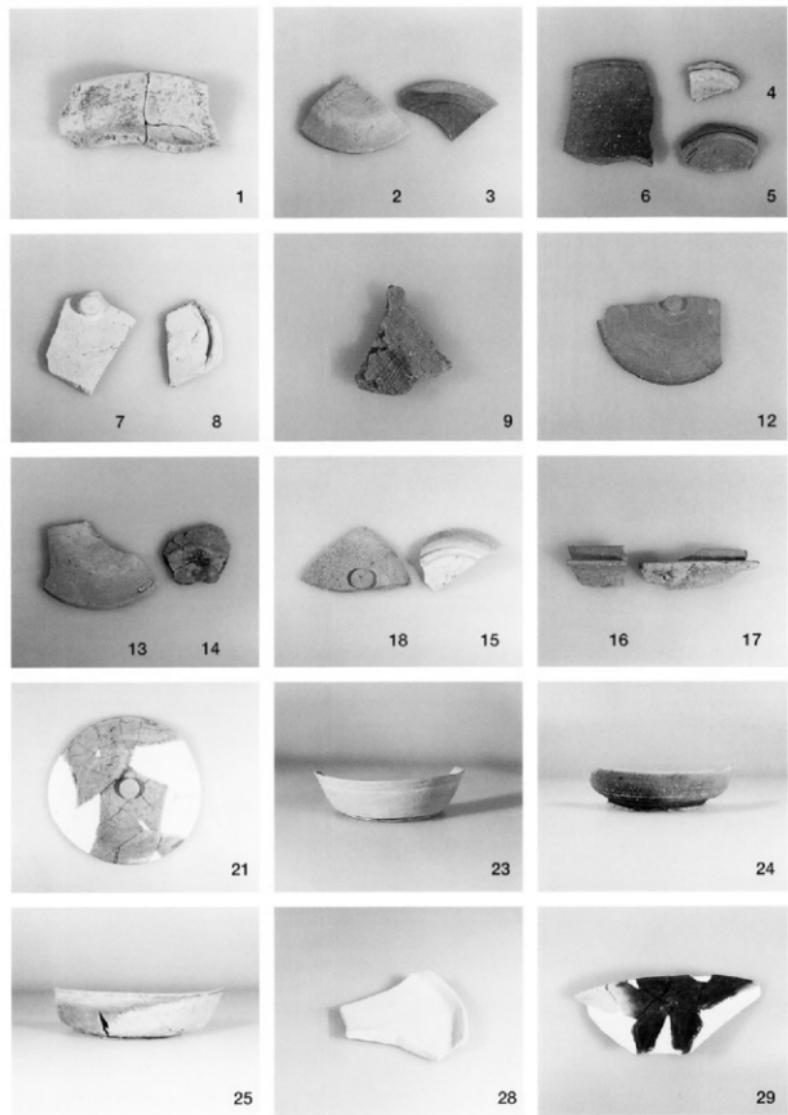
61

62

63

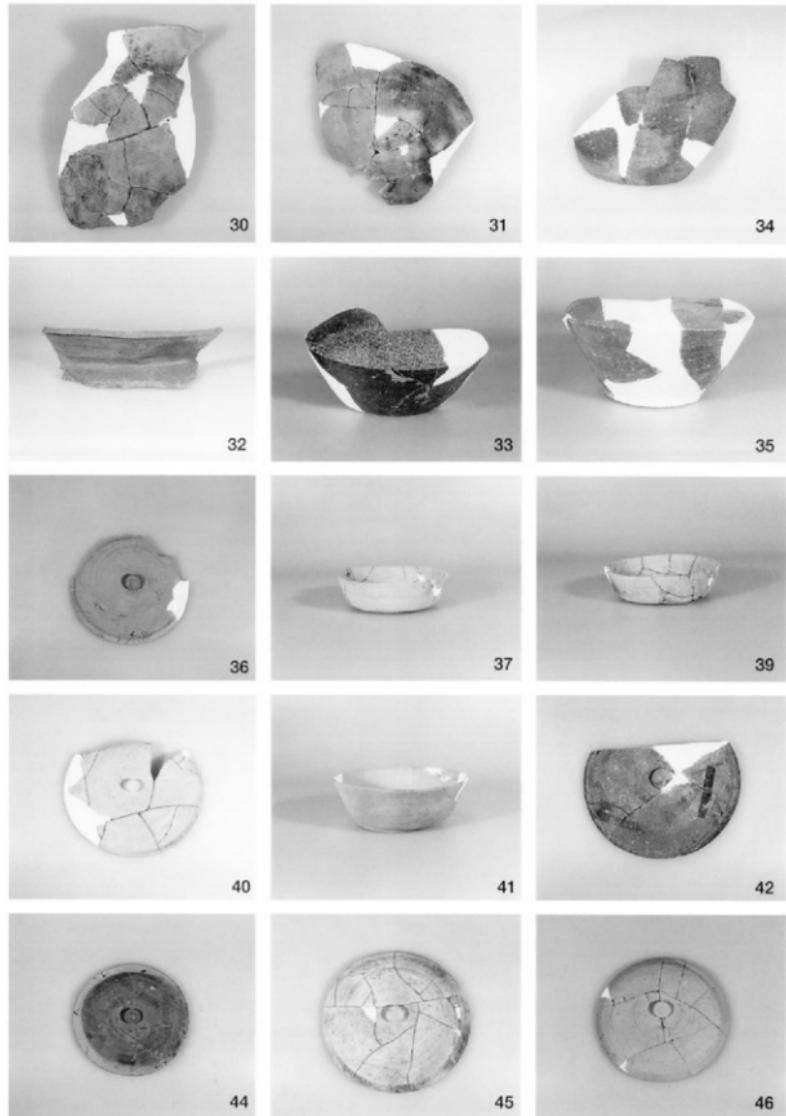
大坪南遺跡出土遺物 I

図版12



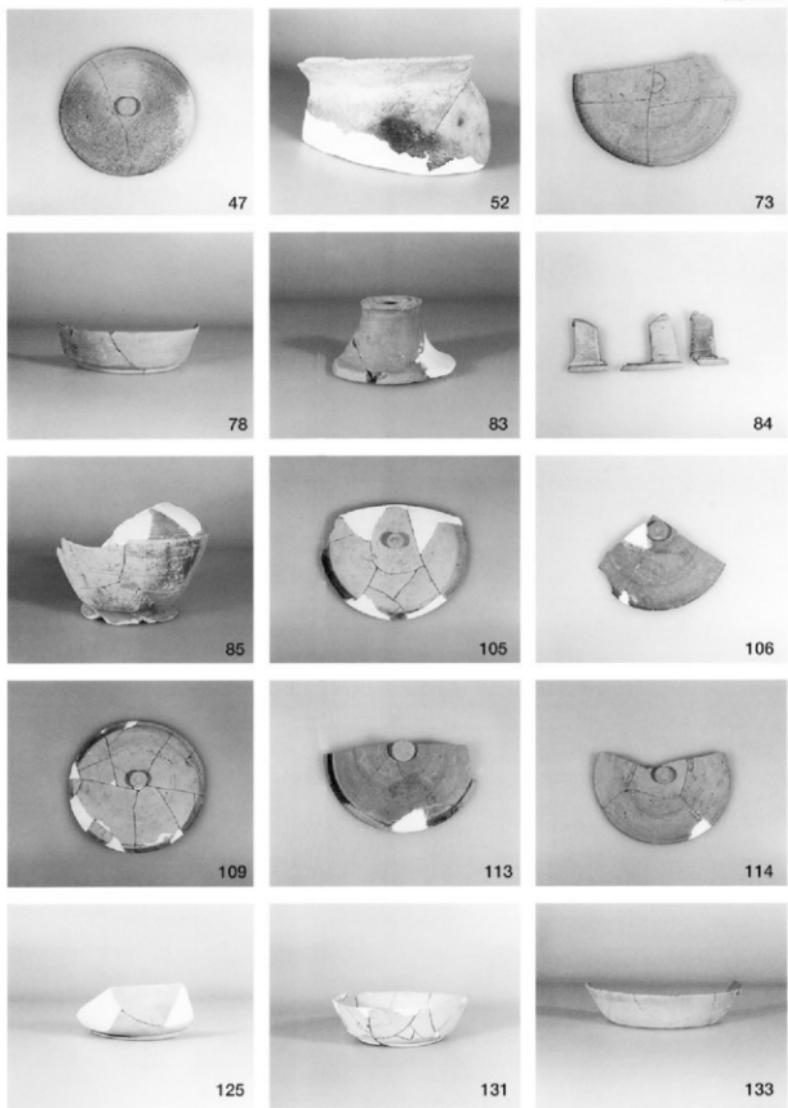
大坪南遺跡出土遺物Ⅱ

图版13



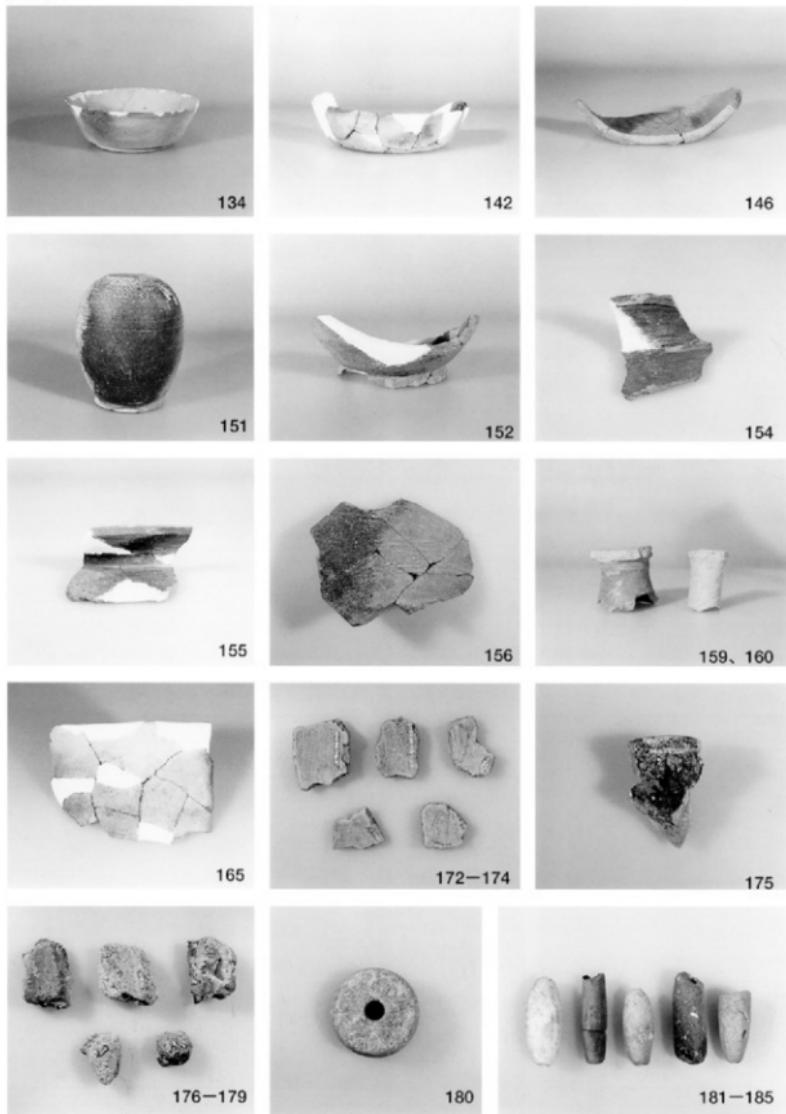
大坪南遺跡出土遺物Ⅲ

図版14



大坪南遺跡出土遺物IV

图版15



大坪南遺跡出土遺物V

---

大坪遺跡・大坪南遺跡

福岡市埋蔵文化財調査報告書 第619集

1999年3月31日発行

発行 福岡市教育委員会  
福岡市中央区天神1丁目8番1号  
印刷 ソウヤマ印刷

---